

【登場人物表】

綾城 正斗 (28) 刑事  
小松澤 濤 (29) カフェの店長  
泉 由妃 (35) 刑事・正斗の先輩  
熊ヶ瀬 諒 (27) スーツアクター  
岩越 茅夏 (24) 元アイドル・諒の彼女  
牧 沙央梨 (26) 保育士・正斗の彼女  
巖堂 海次 (72) 巖堂組の組長  
ヨネザキ フミカ (23) 巖堂の孫  
ヨネザキ レオ (30) フミカの夫  
ヌマベ ユウスケ (16) 高校2年生  
ユウスケの母 (41)  
戸室太玖磨の父 (57)  
戸室太玖磨の母 (55)  
新人刑事 (25) 正斗と泉の後輩  
ベテラン刑事 (49) 正斗と泉の先輩  
保育士 A (32) 沙央梨の同僚  
保育士 B (31) 沙央梨の同僚  
男性弁護士 (50)

○ 高層ビルの屋上（夜）

闇夜の都心にそびえ立つビルの屋上。そこには忍者の様な出で立ちの人影。だがその忍び装束は黒でなく純白だ。頭巾の僅かな隙間から覗く鋭い視線の見下ろす先は向かい側の雑居ビル。その最上階の窓にある法律事務所の事務所名の文字越しには一人でPC作業中の男性弁護士（50）が見える。

それを見た白装束の人物は白い鉤縄<sup>かぎなわ</sup>

（金属のフックの付いたワイヤー）を雑居ビルの屋上目掛けて投げ下ろし、見事広告塔の太い支柱に引っ掛ける。白装束は手元の鉤縄も素早く頭上の鉄骨に固定すると柵を越え、勢いよく東京の夜空に飛び出してワイヤーづたいに雑居ビルの屋上へ渡って行く。屋上に辿り着いた白装束は鉤縄を回収し、次は柵の土台に引っ掛けると鉤縄を手に柵を越えてビルの白壁に同化しながら下がっていき、法律事務所の上まで来ると懐から白い線香を取り出して火を着け、煙を換気扇の隙間から室内へ流し込む。

○ 雑居ビル・法律事務所（夜）

PC作業中の弁護士が煙の臭いに気付いた途端に顔を歪め、鼻を押さえながら立ち上がった窓を開ける。

そこで窓の上にあった白装束が蜂を素早く窓の上部から室内へ投げ入れる。飛び回る蜂に気付いた弁護士は慌ててノートPCを閉じ、部屋を出て行く。白装束はそれを確認すると素早く窓から部屋の中へ入り込む。

○ 同・男子トイレ（夜）

焦りの表情の弁護士が入って来て、一息つきながら用を足し始める。

○ 同・法律事務所（夜）

白装束が別の線香に火を着けるとその煙を浴びた蜂は途端に息絶える。  
白装束は素早く蜂を回収すると弁護士が閉じたPCを開く……が、生体認証でロックされてしまっている。

○ 同・男子トイレ（夜）

用を足し終えた弁護士が出て行く。

○ 同・法律事務所（夜）

弁護士が蜂を警戒しながら戻って来る……が、白装束の姿はどこにも無い。  
弁護士は蜂がいなくなった事を確認すると窓を閉め、またPC作業に戻る。  
そこで弁護士の背後の壁の壁紙がゆつくりとめくれ始める。  
音も立てずに現れたのは隠れ身の術で潜んでいた白装束だ。  
白装束は静かに弁護士の首目掛けて白い吹き矢を放ち、見事に命中する。  
弁護士「痛ッ……まだいたのか、蜂の奴……」  
途端に机に崩れ落ち、眠りだす弁護士。それを確認した白装束は開いたままの弁護士のPCを操作し始める。

画面には『とむろたくま戸室太玖磨様に対する誹謗

中傷事件 発信者情報開示請求者』。

その名簿の一番上には『キダ・ソウジロウ』の住所と電話番号が載っている。

○ タイトル

『乱善超悪』

○ アパートの部屋（夜）

『園児の死因は事故じゃない、殺人だ』  
『お前も死ねば？ 同じ痛み味わって』  
『保育士失格。てか人間失格』等の言葉が並ぶスマホの画面に涙が落ちる。

大粒の涙の主は牧沙央梨（26）。

その隣には心配気な表情で沙央梨を

見つめる綾城正斗（28）がいる。

沙央梨「ねえ正斗、なんで助けてくれないの？  
刑事でしょッ！ 正義の味方でしょッ！」

正斗「だ、だから最近この手の事件が増えてる  
から担当部署の捜査も中々進んで……」

遮る様にスマホを投げつける沙央梨。

沙央梨「聞き飽きたって、そんな言い訳ッ！」

正斗「い、言い訳じゃないって……てか、民事  
の方は？ 弁護士サンは何て？」

沙央梨「時間が掛かるって……そればっかで」

正斗「そっか……てかどんだけ掛かんだよ」

沙央梨「てか何で？ 私有名人でもないのに  
何で皆私のアカウント知ってんのッ？」

正斗「……特定班の仕業だろ。正義感に燃える  
人の振りして只炎上させる放火魔達の……」

そこで沙央梨がおもむろに棚にある  
週刊誌を取って開き、正斗に見せる。

記事にはアパートの部屋のドアに『魔  
女』と落書きされた写真が載っている。

沙央梨「コレ見てッ！ 半年前私と同じで園児  
死なせちゃって誹謗中傷受けた人の家ッ！

このままだと私もこうなるってッ！ ねえ  
こんなのマジで耐えらんないッ！ 偶然の

事故だったのに殺人犯扱いで誰彼構わず無  
差別に攻撃してきてさ、無差別文字テロだっ

てこんなのッ！ もうムリ、限界なのーッ！」  
泣きながら正斗に詰め寄る沙央梨。

正斗「だ、大丈夫だってッ！ 俺が守ってやる、  
絶対守ってやる、正義は必ず勝つからッ！」

沙央梨「……勝つ……？ どうやって……？」  
正斗「……そ、それは……だ、だから……」

言葉に詰まる正斗を睨む沙央梨。

沙央梨「……流石正義の味方だね。行き過ぎた  
正義の、無差別文字テロリスト達のッ！」

正斗「え……ち、違うッ！ 一緒にすんなッ！  
ソイツ等の正義は偽物だッ！ 俺は本物の、

本物の正義の味方だッ！」

沙央梨「だ、だったら早く勝ってよッ！ 必ず  
勝つんでしょ？ 本物の正義ならさーッ！」

叫んで床に突っ伏して泣く沙央梨。

正斗は申し訳無さ氣にうつむくだけ。

× ×

朝になり、曇り顔の正斗がスーツ姿で  
出勤の準備をしている。

ベッドには背を向けた沙央梨がいる。

正斗「……じゃ、じゃあ沙央梨、行ってくるな」

沙央梨は無言で背を向けたまま。

心配気な表情で部屋を出て行く正斗。

○ 一軒家・外観（朝）

朝日の当たる都内の一戸建ての全景。  
庭木の桜の花は満開間近である。

○ 同・ダイニング（朝）

スーツ姿の泉由妃（35）が警察手帳  
を鞆に入れて出勤の準備をしている。  
棚には妊婦姿の泉が夫と写った写真  
盾がある。それを見て微笑む泉。

そこへ保育園の制服姿の泉の息子（4）  
がタブレットを持ってやって来る。

画面は戦隊モノの動画で、タイトルは  
『正義の隠密 忍者ステイス』。

泉「笑顔で）ホント好きだねー忍者ステイス。  
もう放送中止になっちゃったのに」

画面には怪し気な羽根と角が有り、漆  
黒の鎧に身を包んだ悪役が出て来る。

泉「うわ、悪魔侍だ。怖いねー」

ニヤけ顔で息子を抱きしめる泉。

悪魔侍「……この世を暗黒の乱世に戻すのが  
我が使命。人間共は皆斬り捨て御免、正義の  
味方も討ち取ったり、俺様が悪魔侍だーッ！」

決め台詞を叫んで黒い槍を振り回す

悪魔侍。

泉「でた、『魔界の槍』だ。逃げるー」

そこで弁護士を襲ったのと同じ白装

束の忍者が白い鎖鎌を持って現れる。

泉「キタ、忍者ステイスッ！ カッコイイねー」

忍者ステイス「……俺は世を忍んで正義に忠義を尽くす、純真、純潔、純白の正義の隠密、忍者ステイスだーッ！」

白い鎖鎌を振り回しながら勢いよく悪魔侍に向かって行く忍者ステイス。泉『正義の鎖鎌』だ。忍者ステイス頑張れッ！』  
楽し気に息子とじゃれ合う泉。

○ 警察署・外観（朝）

朝日の当たる都内の警察署の全景。

○ 同・刑事課（朝）

曇り顔の正斗の前には泉がいる。

正斗「……泉さん、サイバー犯罪対策課に急かして頂けませんか？ 俺の彼女の件」

泉「いいけど、かなり忙しそうだよ」

正斗「（溜息）やっぱそうですか……」

泉「でも大丈夫だって。誹謗中傷は厳罰化され  
たし、じきに減るよ。もう自爆テロみたいな  
もんだから、無差別文字テロなんて」

正斗「……そうだといいんですけどね……」

○ 沙央梨のアパート・階段（夜）

明かりの灯るアパートの階段を肩を  
落とした正斗が上がって来る。

沙央梨の部屋の前には保育士A（32）  
と保育士B（31）がいて、困惑気味  
の表情でインターホンを押している。

正斗「……あ、あの、何か？ 僕は沙央梨と  
付き合ってる者ですけど……」

保育士A「あ……私達は沙央梨さんの同僚です。  
変なメールが届いたんで慌てて来て……」

保育士Bがスマホを正斗に見せる。  
画面には『私のせいで大変なご迷惑を  
おかけしてしまい、本当に申し訳ござ  
いませんでした。さようなら』の文字。  
思わず目を見開く正斗。

○ 同・部屋（夜）

正斗が駆け込んで来るが中は真っ暗。

正斗「さ、沙央梨ッ！ い、いんのかッ？」

電気を点けた途端にギョツと目を

見開く正斗。

ロフトには首にロープを縛り付けた

沙央梨の遺体がぶら下がっている。

その下の床には走り書きの遺書。

正斗「さ、沙央梨ッ！ 沙央梨―ッ！」

思わず叫び、沙央梨に駆け寄り寄る正斗。

#### ○ 葬儀会場

祭壇には沙央梨の遺影。

その前には号泣する正斗がいる。

#### ○ 同・エントランス

受付には保育士Aと保育士Bがいて、  
受付業務の合間に会場を覗いている。

保育士A「……メツチャ泣いてんね、彼氏」

保育士B「正直こっちだけど、泣きたいのは」

保育士A「そー、沙央梨のせいで保育園潰れる

かんね。早く別の保育園見つけないと」

保育士B「え、まだやんの？ 私もう保育士は

マジ勘弁なんだけど」

保育士A「ウソ、何で？」

保育士B「だっていつでも起こり得るじゃん、

あんな事故なんてさー」

保育士A「まーねー。でも世の中的には殺人犯

だし。それも週刊誌みたいに魔女扱いされて」

保育士B「そう、こちらは清く正しい子供達の

聖母なのにね……てか、今の時代モンスター

ペアレントって親二人だけじゃなくない？」

保育士A「え、他に何人かいるって事？」

保育士B「そう、数十億人。ネットで繋がって

言葉の壁と一緒にモラルの壁も取っ払った

世界中のモンスター人類全員でしょ」

保育士A「確かに……やっぱ私も保育士辞めよ」

そこへ喪服姿の泉がやって来る。

慌てて神妙な表情を作り、頭を下げる

保育士Aと保育士B。

泉は会場内の祭壇の前で号泣する正

斗に気付くと神妙な表情で見つめる。

○ 町工場・外観（夜）

明かりの消えた都内の工場兼住居。

○ 同・工場（夜）

床に物が散乱した小規模の暗い工場。机にはキダ・ソウジロウ宛の請求書。錆びついた鉄骨の梁には初老のキダの首吊り遺体がぶら下がっている。首を縛っているのはゴツゴツとした不規則な形状の………白い鎖だ。そのキダの遺体には三枚の紙が貼られており、一枚目には『乱善超悪 忍者ステイスより』の手書きの文字。二枚目には『今の時代、行き過ぎた正義感によって正義の定義は乱れに乱れ、今や悪をも超える非道なモノとなりつつある！ もはや令和の正義感には勸善懲悪ではなく、悪をも超えた乱れた正義、乱善超悪だ！ よって本物の正義の隠密である私が今の世に蔓延している乱れた正義に対して聖戦を挑むことにした！ 憎き乱善超悪を滅ぼす為の聖戦をな！』の文字。三枚目には『次の乱れた正義は（漢字風の八文字の名前）だ』という文字。

○ 同・外観（朝）

一夜明けた工場には立ち入り禁止用の黄色いテープが張られている。

○ 同・工場（朝）

床に寝かせられたキダの遺体にはブルーシートが掛けられている。その傍には険しい表情で犯行声明が書かれた紙を見つめる正斗がいる。そこへ入って来た泉が正斗に気付く。

泉「え……正斗、いいのか？ もう復帰して正斗「はい。その方が気が紛れるんで……」泉「そっか……でもこんな現場に来なくても」

正斗「大丈夫です。自殺じゃなさそうなんで」

泉に三枚の紙を見せる正斗。

正斗「遺書かと思ったら犯行声明っぽいです」

泉「驚く」え……に、忍者ステイス……？」

正斗「分かります？ 流石ママっすね」

泉「ま、まーね。正斗も流石戦隊マニアだな」

正斗「まあ、子供の頃からなんで。いつも真似

してましたから、正義のヒーローの」

泉「で、リアル正義の味方になった訳か」

正斗「はい。あと、紙もペンもこの物で指紋

も被害者の物だけしか残ってませんでした」

泉「そうか。でも何だこの最後の文字は……？」

三枚目の紙を見て眉をひそめる泉。

正斗「分かりません。中国語とかですかね？」

泉「なら次のターゲットは中国人か？ でも、

何で正義のヒーローの名前で殺人を……？」

訝し気にブルーシートからはみ出た

白い鎖を見つめる泉がハッとす。

泉「ま、待て、忍者ステイス役の俳優って……」

正斗「はい、戸室太玖磨です。半年前に自殺

しましたよ、同じ様に首吊って……」

泉「確か原因はSNSの誹謗中傷だったよな？」

正斗「はい、人妻に手を出しましたからね」

泉「そう、結果その不倫相手と無理心中してね」

正斗「……死んだ後もかなり叩かれましたよね、

全然正義のヒーローなんかじゃないって」

泉「で、放送中止か……息子も泣いてたよ」

正斗「……て事は、このわざわざ首吊り自殺に

見せかけた犯行は戸室への誹謗中傷に対す

る復讐？ 熱狂的なファンとかの」

泉「かもね。この被害者が戸室太玖磨を誹謗

中傷してたらな……」

机の上にあるキダのスマホを取る泉。

正斗「てか、不倫野郎庇って人殺して何が正義

の隠密だよ」

泉「それに今時犯行予告とか……絶対に酔って

んな、正義の隠密演じてる自分に」

正斗「ですね。聖戦ってのも相当ヤバいかと」

泉「だな……てか自分からは戦いを挑まないん

だけどね、実際の昔の忍者は」

正斗「え、そうなんですか？ でも忍術は？  
戦う為のモノでしょ」

泉「いや、アレは逃げる為のモノだ。忍者ってのは実は戦闘員じゃないの、諜報員だから。なんで敵国に潜入しても生きて戻らないと意味無いの。だから忍者にとって戦いつてのは自分の負けを防ぐ為にするモノで、誰かを負かす為にするモノじゃないから」

正斗「そうなんだ……てかよく知ってますね」

泉「本に載ってたから、忍者ステイスの。散々読まされたからね（悪戯っぽく微笑む）」

正斗「あ、成程……て事は犯人はやっぱ偽物っすね、忍者としても正義の味方としても」

泉「当然だろ、人一人殺しちゃってんだから」  
正斗「……でも、俺はこの犯人の事は許せないですけど、気持ちは分かるんですよ……この被害者が本当に戸室を誹謗中傷してたとしたら……」

泉「え、なんだよソレ？」

正斗「だっておかしいでしょ、文字テロリスト共は正義ヅラして悪魔みたいに醜い文章で人を死に追いやってッ！ 立派な犯罪ですよ、文字のテロだってッ！ 厳罰化されたとはいえ何で、何でもっと早く俺ら本物の正義の味方が逮捕出来ないんすかッ！ コイツら偽物の、偽物の正義野郎共をッ！」

キダの遺体を睨みつけながら叫び、  
悔し気にうつむく正斗。

泉はその様子を心配気に見つめる。

#### ○ 警察車両の車内

運転席には曇り顔で運転する正斗。

助手席の泉はスマホでオセロゲーム。

正斗「……そうですか、中国語じゃないんだ」  
泉「そう、あの文字の画像送ったら違うって」  
正斗「歯痒いすね。誰かが狙われているのは分かってんのに警備の手配すら出来ないなんて」  
泉「だね……よし……よし、勝った」

満面の笑みで正斗にスマホ見せる泉。  
画面のオセロは白一色である。

正斗「……てかよく出来ますね、こんな時に」  
泉「やってらんないっしょ、気分転換しないと」  
正斗「まあ、そうですね……でも泉さんも  
共感しません？ さっきの忍者ステイスに」  
泉「ハ……？ しないね、正義の隠密なんか」  
正斗「でも白選んでるじゃないすか、オセロは」  
泉「ハア？ 白とは限らないだろ、正義の色は」  
正斗「え、白に決まってるでしょ」  
泉「いや、何色でもないんじゃないの、正義色  
ってのは。だって悪に染まったとは言うけど  
正義に染まったとは言わないだろ。第一偽物  
の純白の隠密みてーな奴もいるし。てかそも  
そもダメだろ、犯罪者に、悪魔に共感しちゃ」  
正斗「ち、違います、共感したのは悪魔にじや  
ない、偽物の正義を憎む事にですッ！ 出来  
るなら俺が、俺が復讐したいくらいですよッ！」  
ハンドルをぶっ叩く正斗に驚く泉。  
正斗「(我に返って)……す、すいません……」  
泉「(呆れ顔で)……相変わらず正義バカだな。  
やっぱもう少し休んだ方がよくないか？」  
正斗「い、いえ、大丈夫です……」  
泉「無理すんなよ。令和の警察が順守すべきモ  
ノは正義の前に法定労働時間だからね」  
悪戯っぽくニヤける泉。

○ 正斗のアパート・外観(夜)

都内の明かりの灯るアパートの全景。

○ 同・正斗の部屋(夜)

壁には戦隊モノのポスターが貼られ、  
棚にもフィギアが並んでいる。

そこへ曇り顔の正斗が帰って来ると  
白猫がゆっくり歩み寄り、出迎える。

正斗「(微笑んで) ただいま、ハク」

チェストの上に置かれた沙央梨の写  
真盾が目に入り、真顔に戻る正斗。

正斗「……沙央梨、俺はもう絶対に負けないよ、  
偽物の正義には。最後には必ず勝って仇を取  
ってみせる、本物の、本物の正義の力で……」

○ 警察署・刑事課（朝）

眩い春の朝日が差し込むオフィス。

正斗の前にいる泉の手にはビニール袋に入った不規則な形状の白い鎖。

正斗「……え、凶器からは犯人を追えない？」

泉「そう、コレは何種類もの鎖を繋ぎ合わせて作られたモノらしくて、白い塗料も様々なモノが混ざってるから特定出来ないんだって。

只の戦隊オタクの仕業じゃねーぞ、コレは」  
正斗「ですね。工場の防犯カメラも全部壊されましたし……てか、戸室太玖磨の両親が誹謗中傷の被害を訴えてたようです」

泉「よし、じゃあそこから手を付けるか」

正斗「はい。でも、キダのSNSには戸室への誹謗中傷は残ってませんでした」

手袋をした正斗の手にはキダのスマホがあり、画面にはキダのアカウントのSNSが表示されている。

泉「削除したかもだね。SNSの運営会社にデータの復元依頼するか」

そこで突然、キダのSNSに最新の投稿がアップされる。

思わず「エッ！」と目を見開く二人。  
投稿された動画には首に白い鎖を巻かれて犯行声明を書く生前のキダの姿……慌てて動画を再生する正斗。

キダ「書き終えて）……よ、読めばいいんですね……ら、乱善超悪……に、忍者ステイスより……い、今の時代……い、行き過ぎた正義感によって正義の定義は乱れに乱れ……い、今や悪をも超える非道なモノとなりつつある……も、もはや令和の正義感は勸善懲悪ではなく悪をも超えた乱れた正義……乱善超悪だ……よ、よって本物の正義の隠密である私が……い、今の世に蔓延している乱れた正義に対して聖戦を挑むことにした……に、憎き乱善超悪を滅ぼす為の聖戦をな……」

その後キダの悲鳴、動画も終わる。

泉「……クソ、あの筆跡はキダのだったか……」

正斗「て、てか、死人のSNSが……」

泉「予め聞き出しといたIDとパスワードで別の端末からログインして動画アップしたんだろ、はんに……忍者ステイスが」

困惑気味に画面を見つめる正斗と泉。

○ 戸室太玖磨の実家・外観

『戸室』の表札のある都内の一軒家。

○ 同・リビング

正斗と泉の前には太玖磨の父（57）と太玖磨の母（55）がいる。

太玖磨の父「……そうです。弁護士さんに発信者情報開示請求を依頼してるところです」

正斗「その中にキダ・ソウジロウという男は？」

太玖磨の父「いえ、まだ知らされてなくて……」

泉「そうですか。弁護士さんに聞いてみます」

太玖磨の母「……でも太玖磨は悪く無いんです、

世間で言われているのは違って。あの子は不

倫相手を救ったの、相手の旦那のDVから」

正斗「え……そうなんですか？」

太玖磨の父「はい。アイツは悪魔の様な男の暴力に苦しんでる女性を助けただけなんです。

自分が演じてた正義の味方と同じ様にッ！」

太玖磨の母「あの子は真剣に恋愛してたんです。相手が離婚したら結婚して幸せにするって」

滲み出た悔し涙を拭う太玖磨の母。

泉「……そうでしたか……でもなんで世間にはソレが伝わってないんですか？」

太玖磨の父「分かりません……何度もマスコミには話したんですが、一切……」

怪訝な表情で泉と顔を見合わせた正

斗がふと棚にある写真盾に目を移す。

そこには子供の頃の太玖磨が同じ年

頃の少年と空手の道着姿で仲良さ気

に肩を組んでいる写真がある。

太玖磨の母「（気付く）……隣の子は諒君です、

熊ヶ瀬諒。一緒に空手教室に通ってた親友の」

正斗「え、熊ヶ瀬って……スーツアクターなの？」

泉「知ってるの？ 正斗」

正斗「はい。悪魔侍です、忍者ステイスの敵の」

泉「え……マジか、正義と悪魔が親友……？」  
太玖磨の父「はい……でもきつとファンの人な  
んでしょうね……犯人……忍者ステイスは」  
太玖磨の母「……違う、太玖磨、太玖磨本人よ」  
太玖磨の父「え？ な、何言ってるんだ、お前」  
太玖磨の母「生きてるの、太玖磨はッ！ 生き  
返ったのよッ！ それで復讐しに来たのッ、  
真実を伝える為にッ！ 自分は本物の、本物  
の正義のヒーローなんだってーッ！」  
太玖磨の父「お、落ち着けッ！ お前ッ！」  
思い詰めた表情で取り乱す太玖磨の  
母を必死でなだめる太玖磨の父。  
それを神妙な顔で見つめる正斗と泉。

○ 警察車両の車内

正斗と泉の前方には法律事務所の  
ある白い壁の雑居ビルが見える。  
泉「電話を切って……結局いなかったって、  
犯人の目撃者。それに盗難された物だって、  
忍者ステイスがキダの動画上げたスマホは」  
正斗「やっぱ素人じゃないっすね、コレは……」  
泉「てか、熊ヶ瀬って名前ひよっとして……」  
正斗「はい、元同業者です。特殊部隊員だった」  
泉「やっぱそうか……確か一般人に怪我させた  
んだよな、銃の暴発事故起こして……」  
正斗「でも何故か自分から辞めたんです、警察」  
泉「そう、そこまでする必要無かったのに……」  
溜息交じりにスマホを見る泉。  
泉「……うわマジか。もうトレンド入ってるぞ、  
忍者ステイス」  
泉がSNSを開くとキダが映った動  
画が次々と拡散されていっている。

○ 法律事務所・応接スペース

正斗と泉の前には男性弁護士がいる。  
弁護士「……はい、確かにキダさんは戸室さん  
への誹謗中傷を繰り返し行っていました」  
正斗「その情報を外部に漏らした事は？」  
弁護士「いえ、誰にも話してません。PCも  
助手でさえ見られないようにしてますから」

泉「そうですか。ではこの文字列に心辺りは？  
キダ以外の誹謗中傷の加害者の名前じゃ？」

犯行声明の三枚目の画像を見せる泉。

弁護士「眉をひそめて）……中国語ですか？」

正斗「それが違うんです。でも、誰かの名前を  
表してる文字って事は確かなんです」

弁護士「(PCを見て) ……いや、他の加害者  
とは文字数が違いますね、漢字でも平仮名  
でも。それにアルファベットにしても……」

泉「……違うか……なら一体誰の事なんだ……」  
共に困惑の表情を浮かべる正斗と泉。

弁護士「……ようやく通ったところだったんです  
けどね、開示請求が……」

残念そうに溜息をつく弁護士だが正  
斗は思わずムツとする。

正斗「……出来なかったんすか？ もっと早く」  
弁護士「え、いや、これでも精一杯急いで……」

遮るように立ち上がる正斗。

正斗「救えた命があったかもしれないんだッ！  
もっと早く処理出来ればッ！ 何で、何で  
いつもそんなに時間が掛かるんだッ！」

泉「正斗、やめろッ！」

正斗「(我に返って) ……す、すいません……  
で、でもおかしいですよ、本物の正義を証明  
するのに時間が掛かるのは。偽物の正義は  
文字ですぐに人を殺せるっていうのに……」  
悔し気な表情で唇を噛み締める正斗。

#### ○ 警察車両の車内

不機嫌そうな顔で運転する正斗。

泉は助手席でまたオセロゲーム。

泉「……やったね。へへ、また勝ちましたー」

笑顔でオセロの画面を見せる泉。

今度は黒一色である。

正斗「いや、負けてんじゃないすか」

泉「いや、変えたんだ、色を(ニヤリ)」

思わず「あ……」と気付く正斗。

泉「……正義も悪もオセロと一緒に、白黒一体

状況とか時代によって裏返るだろ、結果は」

正斗「え、どういう事すか？」

泉「今の忍者ステイスがそうだろ。それに戦争だってね。普通人を殺せば殺人犯だ。でも戦場でなら敵を殺せば殺す程英雄扱いだろ。

いいか、裏返るんじゃないぞ、正義バカ」

正斗「え、俺が？ 裏返りませんよ絶対に」

泉「どーだか。忍者ステイスに共感してただろ」

正斗「だ、だからアレは……」

泉「(遮って) いいか正斗、正義感つてのは酒

みたいなもんだ。たしなむ程度なら構わねー

けど酔いが回ると正義と悪の境目が分から

なくなるからね……気を付けろよ、正義酒に」

正斗「わ、分かってますよ、それくらいッ！

もし裏返ったら辞めますから、警察はッ！」

泉「(鼻で笑う)大丈夫か？ そこまで言って」

正斗「勿論ですッ！ 命を懸けて本物の正義を

守る事ですから、俺の、警察の仕事はッ！」

その言葉を聞いた泉は途端に今まで

にない険しい表情で正斗を睨む。

泉「……命？ 大事な命なんか懸けるなッ！

正義なんかにッ！ それに警察が守るのは

正義じゃない、秩序だ」

驚きの余り「え……」と固まる正斗。

#### ○ 警察署・刑事課

正斗と泉が戻って来るとテレビのニ

ュース画面にはモザイクがかけられ

たキダが犯行声明を読み上げる動画

が映っている。

溜息交じりにスマホに目を移す正斗。

SNSには『忍者ステイス降臨マジエ

モい』『乱れた正義対正義の隠密は草』

『戸室の亡霊説は胸熱』等の投稿が

上がっている。

泉「……正斗、熊ヶ瀬諒を当たってみるか？」

正斗「え、じゃあ熊ヶ瀬が戸室の敵討ちを？」

泉「条件は揃ってるからね。仕事仲間で親友で

しかも元S A Tだ。こっちの手の内は分かり

切ってるし、身体能力だって申し分ないだろ、

人の首に鎖を掛けて宙吊りにする位は」

正斗「……有り得ますね、全然」

泉「だろ？　じゃあ私は熊ヶ瀬を当たるから、

正斗は元アイドルで彼女の岩越茅夏ちなつを頼む」

スマホを正斗に見せる泉。画面は週刊誌の熱愛発覚のネット記事で、仲良さ気に歩く熊ヶ瀬諒（27）と岩越茅夏（24）の画像が写っている。

○ 撮影スタジオ・外観（夕方）

西日の当たる撮影スタジオの全景。

○ 同・楽屋（夕方）

泉が使い込まれた悪魔侍の衣装に興味有り気に触れている。

その横には手の甲に大きな火傷の痕がある諒がいる。

泉「……へー、凄く精巧に出来てるんですね」

諒「でしょ。専門の企業サンが作ってるんで」

泉「じゃあ、忍者ステイスもですか？」

諒「ええ、そうすけど」

泉「なら素人では無理ですか？　複製は……」

諒を見てニヤリと笑う泉。

諒「（動じず）ネットで買えますよソレに近い

物は。自分で作っちゃうファンとかもいるし」

泉「……そうですか……では、三日前の夜は

どこにいました？」

諒「え……嘘、俺疑ってます？　俺は敵、悪魔

つすよ。何で正義のヒーローなんか……」

泉「（愛想笑いで）一応です。確認の為に」

諒「（不服そうに）……一緒でしたよ、彼女と」

○ 芸能事務所・外観（夕方）

都内にある芸能事務所の全景。

○ 同・応接室（夕方）

正斗の前には茅夏がいる。

茅夏「……その日は会ってました、諒くんと」

正斗「そうですか……では戸室さんが不倫相手

を旦那のDVから助けてた話は御存じで？」

茅夏「え……知りません。何の話ですか？」

途端に目を泳がせ、うつむく茅夏。

正斗「(怪しむ) ……大丈夫です、秘密にして  
おきますから。ご存じでしたら教えて下さい、  
その話が何で世間に公表されていないかを」

ためらいながらも顔を上げる茅夏。

茅夏「……ぜ、絶対秘密ですよ。相手の旦那は  
偉い人の息子なので、大手の事務所の……」

思わず「そういう事か……」と納得し  
た表情を浮かべる正斗。

○ 撮影スタジオ・楽屋(夕方)

引き続き泉と諒が話している。

泉「え……絶交状態だった？ 戸室さんと？」

諒「はい。だって周りの扱いが違い過ぎるんで。

常に虐げられてたんすよ、悪役の、悪魔の俺  
は。なんで自然と距離が出来てそのまま……」

泉「そうですか……じゃあ日頃から影で忍ぶ  
生活をしてた訳ですね？」

諒「(鼻で笑って) なんすか？ ソレ」

泉「いえ、別に……てかその傷は例の事故で？」

諒「……ですよ。やっぱ知ってますよね……」

苦笑いで手の火傷の痕を見つめる諒。

泉「でも何で自分から辞めたんですか？ 警察」

諒「え……まあ、ケジメってヤツで……」

泉「そうか……因みにやっぱ多いんですか？」

芸能人への誹謗中傷って」

諒「まあ、特に俺は悪魔なんで攻撃されますよ、  
ビジネス正義戦隊共から」

○ 芸能事務所・応接室(夕方)

同じ内容の話をする正斗と茅夏。

正斗「……え、ビジネス正義戦隊……？」

茅夏「はい、こちらはそう呼んでいます。奴等の  
スーツアクターのスーツは形だけの業務的  
な正義感で着飾ったビジネススーツで、本当  
は聖人君子でも何でもないのに正義の味方  
演じてネットのコメント欄やSNSで匿名  
で誹謗中傷ばっかしてるクソ素人猿芝居役  
者達の事です」

正斗「(苦笑い) ……言いますね」

茅夏「それ位言う資格有るんで。奴らのせいで一時期活動休止に追い込まれましたから」

正斗「あ……ソレって週刊誌の記事で……？」

茅夏「はい。アレのせいで卒業後に付き合い始めたのにグループにいた時からだったって嘘広められて……おかげで悪役扱いですよ、ファンを裏切ったにつくき『怪人オタ裏切り』扱いですよッ！ で、始まったんです、正義の名の元に匿名の誹謗中傷って卑怯で汚い必殺技を繰り出す偽物の正義戦隊達からの1対集団のネットリンチがッ！ 戦隊モノで隊員達が怪人をボコる時と同じ様にッ！」

○ 撮影スタジオ・楽屋（夕方）

同じ内容の話をする泉と諒。

諒「……当然俺にも誹謗中傷が……でも、世間的には大した騒ぎじゃなかったんです、3流アイドルとスーツアクターの熱愛程度じゃ。知らなかったでしょ？ 刑事さんも」

泉「え、ええ、まあ……」

諒「最初騒いでたのはオタク達だけでほんの煙程度だったんです。でも、いつの間にか誰も呼んでない、誰も助けを求めてないのに気づいたら無関係の別の正義戦隊達にも困まれて……まるでスーパー戦隊大集合ですよ。

で、奴等が只の煙に次々と批判の、誹謗中傷の炎を点け始めて炎上させた結果、茅夏の心は大爆発です。マジで怪人の最期と同じ様に」

泉「……そうですか……ホントに厄介ですね、行き過ぎた正義感っていうのは……」

諒「……いや、俺は実際は無いと思ってますよ、アイツらに正義感なんてモンは」

泉「え……？」

諒「奴等の正義はビジネス、表向きだけっす。なんで実は持ってないんです、正義感なんて」

泉「……何でそう思うんですか？」

諒「まあ、平成の頃の現実には絶望してネットの世界に避難してた批判民達にはあったかもですけど……てか本当に正義感があったらしないでしょ、姑息に匿名で誹謗中傷なんか」

泉「まあ、確かに……」

諒「てか一般人はそうそう持ってませんって。

戦隊モノだってそうだし。地球の平和の為に

怪人と戦うヒーロー達も最初は只の一般人

だから彼らでさえ元々持ってなくて徐々に

芽生えていく設定なんすよ、正義感って」

泉「……じゃあ、何で皆批判なんか……？」

諒「それは批判が一番簡単な方法だからなんで、

アホが頭を良く見せるには……どっちが賢

く見えます？ 注意する人とされる人なら」

泉「まあ、前者かと……」

諒「ですよ。なんで実は今時の誹謗中傷する

人間にとって批判行為ってのは正義感から

生まれたモノじゃなくて自分は頭が良い人

間だと認めて貰いたいっていう承認欲求を

満たす為のモノなんで……他人の間違いに

迅速に気付けて、他人の失態を的確に指摘出

来て、他人の過ちを正しく修正出来る頭の良

い人間だと社会に認めて貰うっていう……」

泉「……何でそんな目的でやると……？」

諒「最強だからっす、令和では頭の良い人間が。

実は正しさより強さの方が価値が有るんで、

今時の令和戦隊の隊員達の間では。でもガチ

で頭の良い人間って相当レアだし、大抵弱者

でしょ、権力者を妬む事しか能の無いアホな

妬民族のネット民達は。なんで奴らは間違い

を犯した人間を見つけ次第正義戦隊の隊員

演じて批判しまくるんです。自分は頭が良い

人間だって、権力に抗える強い人間だって、

社会に必要な人間だって、戦隊ヒーローの

決め台詞ばりに誹謗中傷を吐き捨てながら。

強くないと絶対生き残れない現実社会戦隊

の役を掴み取りたいっていう一心で……」

### ○ 警察署・外観（夜）

明かりの灯る警察署の全景。

### ○ 同・刑事課（夜）

夜のオフィスで話す正斗と泉。

正斗「そうですね、同じ事話してたんだ……」

泉「色々大変なんだね……令和の有名人って」  
正斗「か、関係無いです有名か無名かはッ！  
一般人も熊ヶ瀬達の言うビジネス正義戦隊  
の攻撃対象なんでッ！」

泉「……そうだったね、ゴメン」  
そこで傍にいた男性の新人刑事(25)  
が慌てて立ち上がる。

新人刑事「い、泉さん、コレ見て下さいッ！」  
自分のスマホを泉に見せる新人刑事。  
SNSの動画には雑な忍者ステイス  
のコスプレをした中年男性の姿。

中年男性「……お、俺も忍者ステイスだッ！  
い、今は醜い乱善超悪の時代だッ！ 乱れた  
正義を振りかざす奴等に復讐してやるッ！  
仕事が出来ないのを棚に上げて会社に俺の  
パワハラを告発したクソ部下共になッ！」

そこで動画が終わる。  
泉「……クソ、何だよヤベー奴が出て来たな、  
猿芝居忍者のせいだ」

正斗「……どうします？ この大根役者は」

泉「……模倣犯は他に任せて次はファンだな」  
正斗「じゃあ俺行ってきます、ファンの聖地に。

戸室が普通ってたカフェがあるんです」

泉「よし、なら明日ファンのふりして行って  
くれ。こっちは熊ヶ瀬を追い詰めるから」

新人刑事「え、でも彼女と一緒に居たんじゃ？」

泉「って言う台本なんだろ。俳優だぞ、奴は」

#### ○ カフェ・前の道(朝)

眩しい朝日の当たる店の前には開店  
作業中のナチュラルボブヘアがよく  
似合う小松澤滯(29)がいる。  
そこへ私服姿の正斗がやって来る。

#### ○ 撮影スタジオ・エントランス(朝)

泉と新人刑事の前には困り顔の諒の  
女性マネージャー(37)がいる。

泉「……え、来てない？ 熊ヶ瀬さんが？」

マネージャー「はい、連絡もつかなくて……」

新人刑事「マ、マジか……逃げたんですかね？」

マネージャー「え、そ、そんな……」

泉「マネージャーさん、教えて貰えますか？  
熊ヶ瀬の家の場所をッ！」

○ カフェ・店内（朝）

人気の無い店内の客席には正斗と毛  
づくろいをする黒猫が一匹いるだけ。  
そこへ『店長』の名札を付けた漣がコ  
ーヒーを運んで来る。

正斗「あの、ここって戸室さんが昔よく来てた  
お店ですよね？」

漣「ええ、そうです。ファンの方ですか？」

正斗「はい、ずっと懂れてて」

漣「そうなんですわね……久し振りなんで嬉しい  
です、ご新規様は」

正斗「え、そうなんですか？」

漣「はい、事件のせいでお客様減っちゃって。  
増えたのは警察の方とマスコミだけで……」

○ 諒のマンション・前の道（朝）

到着した新人刑事の運転する車から  
泉とマネージャーが駆け降りて来る。

○ 同・部屋（朝）

マネージャーが合鍵でドアを開ける。  
泉が駆け込むが部屋には誰もいない。  
泉「クソッ、他に居そうな所教えて下さいッ！」

○ カフェ・店内（朝）

黒猫が正斗と漣の足元にやって来る。

正斗「（気付いて）あ、可愛い子ですね」

漣「好きなんですか？ 猫ちゃん」

正斗「ええ、1匹飼ってます。白猫を」

正斗の足に擦り寄る黒猫。

漣「こらコク、お邪魔でしょ」

正斗「え……コクって……名前ですか？」

漣「はい。この子私の猫で置いて貰ってて……」

クロだと普通だから音読みにしたんです」

正斗「マジすか、僕の白猫もハクって名前で」

漣「嬉しそうに）ええっ、凄い偶然ッ！」

正斗「ですね、初めて会いました」

滯「ホントに？ 私もです」

正斗「てか……店長さん御一人なんですね」

滯「ええ、最近はこんな感じなので……」

正斗「仲良かったんですか？ 戸室さんとは」

滯「いえ、実家が……この近所で前の仕事辞めて戻って来たたら求人見つけて……って感じで」

○ 警察車両の車内

共に険しい表情の泉と新人刑事。

新人刑事「どこに逃げ回ってるんですかね？」

彼女の家にも実家にも居ないって事は……」

泉「……まるで落ち武者だな、魔界の悪魔侍も」

○ カフェ・店内

店内の時計は既に昼前である。

正斗はファン達が書いたメッセージ

ノートを見て怪し気な文面が無いか

真剣な表情で調べている。

そこへ滯がやって来て、数個の茶色

くて丸い物に乗せた皿を差し出す。

滯「随分ご熱心ですね。どうぞサービスです」

正斗「あ……ありがとうございます。コレって

ひょっとして『正義の兵糧丸』ひょうろうがんですか？」

滯「はい、忍者ステイスのパワーフードです。

餅米と朝鮮人参と干し魚を砕いた物と梅干

と山芋なんかを混ぜ合わせて作ってます」

思わず「マズそう……」と顔を引きつ

らせる正斗を見て軽く吹き出す滯。

滯「ゴメンなさい冗談です。今のは昔の話で、

コレはチョコ味のスイーツですから」

正斗「(ホッとして) そ、そうですか……」

滯「(微笑んで) ……今日はお休みですか？」

何されてるんですか？ お仕事は」

正斗「あ……公務員です(作り笑顔)」

滯「そうなんですね、平日お休みなんですね」

正斗「ええ、まあ……(誤魔化す様に) てか、

何されてたんですか？ 前のお仕事って」

滯「え……いいじゃないですか、私の事は」

急に曇った顔を背ける漕。

正斗「え……す、すいません……」

正斗がバツが悪そうな顔でノートをめくると犯行声明の三枚目と同じ漢字風の文字が十三文字も出てくる。

○ 警察署・外観（夜）

明かりの灯る警察署の全景。

○ 同・刑事課（夜）

険しい表情で戻って来た泉をスマホを手にした正斗が出迎える。画面にはカフェのノートにあった文字の画像。

泉「……コレか、ファンのメッセージは」

正斗「はい。熊ヶ瀬はまだ行方不明で……？」

泉「うん、立ち寄りそうな場所は探したけどね」

そこへノートPCを手にした男性の

ベテラン刑事（49）がやって来る。

ベテラン刑事「防犯カメラの映像だ。店行ってコピーしてきたんだ。戸室のファンのお方から貴重なご通報を頂いたからよお」

悪戯っぽいニヤけ顔で正斗を見なが

ら映像を再生し始めるベテラン刑事。

そこには女性らしき人物の姿。

泉「……え……お、女……？」

ベテラン刑事「ファンの常連客だそうだ。俺はくノ一じゃねーかと睨んでんだけどなあ」

正斗「何言ってるんですか。泉さんどうします？」

店の会員記録で住所は分かっているんですが」

泉「……よし、じゃあ踏み込むか」

そこへ泉のスマホに着信がある。

泉「……はい……エッ？ 見つかったッ？」

○ アパート・前の道（夜）

都内の単身用アパートの前に数台の

警察車両が到着し、防弾チョッキ姿の

正斗とベテラン刑事と数名の警察官

が駆け降りて来る。

正斗は一階にある部屋の前まで来る

と緊張気味にインターホンを押す。

ゆっくりとドアが開き、地味目な風貌の女子大生(21)がそつと顔を出す。

○ 総合病院・ロータリー(夜)

都内にある大きな病院に新人刑事の運転する警察車両が到着する。

○ 同・時間外受付(夜)

人気の少ないロビーに諒とマネージャーがいる。そこへ泉がやって来る。マネージャー「すいません、ご面倒おかけして」泉「な、何だったんですか……?」

マネージャー「それがここにずっと居たと……」諒「……いや、昨日の夜からどうも体調悪くて……で、ここ来て点滴受けたらそのまま寝ちゃって……まあ、慣れない事あったんで疲れてたんでしょうね。俺の、悪魔の大嫌いな正義のヒーローなんかに疑われたんで……」

嫌味っぽく泉を見る諒。

その背後にある時計は午後7時過ぎ。

○ 公営団地・外観(夜)

明かりのまばらな古めの団地の全景。

○ 同・部屋(夜)

暗い部屋の机の上にはシモバヤシ・アキの名前のある公共料金の督促状。居間の鴨居には白い鎖で首を縛られた中年女性のシモバヤシ・アキの遺体がぶら下がっている。その前には……『乱善超悪 忍者ステイスより』の紙を遺体に貼り付ける 忍者ステイスがいる。

○ 総合病院・時間外入口(夜)

泉と諒とマネージャーが出て来る。

諒「……もう話す事無いすよ、来られても」

マネージャー「体調もアレですし、今日は……」

そこへ新人刑事が駆け寄って来る。

新人刑事「い、泉さんッ、コレ見て下さいッ!」

焦り顔でスマホを見せる新人刑事。  
画面はシモバヤシ・アキのアカウント  
のSNSで、投稿された動画には生前  
のシモバヤシが二枚の紙に文章を書  
かされている様子が映っている。  
その背後の時計は午後7時前だ。  
書き終えて震える手で二枚の紙を画  
面に向けて見せるシモバヤシ。

紙には『乱善超悪 忍者ステイスより』  
の文字と『次の乱れた正義は（漢字風  
の八文字の名前）か、（漢字風の別の八  
文字の名前）のどちらかだ』の文字。  
その後方の窓に見切れてるのは……

綺麗にライトアップされた大阪城だ。  
その後また悲鳴と共に動画も終わる。  
新人刑事「コ、コレついさっきなんですッ！  
し、しかも大阪みたいで、犯行現場がッ！」

泉「な、なにッ！（と驚いたまま諒を見る）」  
諒「……て事は晴れたようっすね、疑いが」  
ホッとした笑みを浮かべる諒。  
困惑の表情で見合う泉と新人刑事。

#### ○ アパート・女子大生の部屋（夜）

狭い部屋の壁一面には戸室太玖磨の  
ポスターや雑誌の切り抜きが所狭し  
と張ってある。

その前に女子大生と正斗達がいる。

ベテラン刑事「……え？ 忍者の暗号……？」  
女子大生「は、はい、『忍びいろは』です。戸室  
クンきっかけで忍者沼にドはまりして……」

正斗「じゃあ、あのノートには何て……？」  
女子大生「そ、それは決まってるじゃないです  
か、『生き返ってくれて嬉しい』って……」  
壁に張られたポスターを見上げて危  
ない目つきで薄ら笑う女子大生。

#### ○ 警察署・刑事課（夜）

曇り顔の泉と新人刑事が戻って来る。  
そこへ正斗も戻って来る。

正斗「泉さんあの文字は忍者の暗号でしたッ！」

泉「なに？ 暗号？」

正斗「はい、カフエで文字を書いた女子大生に大阪での暗号を解読して貰って、昨日の弁護士に確認したら情報開示請求者の残り二名の名前と一致しましたッ！」

泉「な、なにッ！ やっぱ漏れてたのかッ！」

正斗「みたいっすね。で、その二名はヌマベ・

ユウスケとヨネザキ・フミカで、暗号と文字数が合わないのは濁音は二文字で表現するからだそうです。家は二人共都内ですッ！」

泉「よし。じゃあ、私はヌマベの警護に行く。

正斗はヨネザキを頼むッ！」

○ ヌマベ・ユウスケの家・外観（夜）

下町にある古めの長屋の前に警察官達が集まっている。

○ 同・居間（夜）

狭い居間で困惑の表情を浮かべる泉。

その前にいるヌマベ・ユウスケ（16）は着古したパジャマ姿の高校生だ。

隣にはユウスケの母（41）もいる。

泉「……ユウスケ君、暫く学校は休んで下さい」

ユウスケ「……だ、大丈夫です。高校にはもう

全然行ってないんで……」

泉「そっか……でも何で誹謗中傷なんか……？」

ユウスケ「……い、虐められて……ス、スト

レス解消に……でもまさかこんな事に……」

ユウスケの母「只の、只の子供の悪戯なんです。

それが、それが何でこんな……」

泉「子供と大人の腕力の差は有りませんからね、言葉の暴力には」

ユウスケの母「そ、そんな……け、刑事さん、

この子は大丈夫ですよ？ 守って下さい

犯人からッ！ 忍者ステイスからーッ！」

○ ヨネザキ・フミカの家・外観（夜）

都心にそびえ立つタワーマンシヨンの全景。

○ 同・玄関（夜）

正斗の前にはヨネザキ・フミカの夫の  
ヨネザキ・レオ（30）がいる。  
チャラ男風の派手目な服装のレオの  
腕には寝息を立てる赤ん坊がいる。

正斗「……え、フミカさんはここにいない？」

レオ「そうっす、嫁は今実家っす」

正斗「え、何で実家に？」

レオ「事件の事知ってヤベーかもってなつて  
……ま、俺が守るよりレベチで安全なんで」

正斗「……どういう事ですか？」

レオ「行けば分かるっしょ、アイツの実家に」

正斗「分かりました。でも何で子供を残して？」

レオ「でしょ？ フツ―連れてくっすよね」

正斗「……何か事情が？」

レオ「それはまあ、悪いのは俺なんすけどー。  
ま、監視役つてとこすかね、この子は」

思わず「何だ……？」と眉をひそめる  
正斗。

○ フミカの実家・外観（夜）

一際高い扉に囲まれた大きな屋敷。

その扉の上には何台もの防犯カメラ。

立派な門には船の錨いかりのマークの上に

『厳』の文字のある代紋と『厳堂組』

と書かれた大きな看板。

そこへ警察車両が到着し、車から降り  
た正斗が代紋を見上げる。

正斗「……成程……確かに安全かもな……」

そこへ警察車両がもう一台やって来  
て、険しい顔の泉が降りて来る。

正斗「（気付いて）……泉さん、まさかですね」

泉「ああ、本物の悪魔だからな、コイツ等こそ」

○ 同・応接室（夜）

壁には大魚の魚拓、棚には立派な船の  
模型も飾ってあるがそれ以外は殺風  
景で、色褪せたカーテンはほつれ、  
年代物のソファ―は所々破れている。

そのソファ―に険しい表情の正斗と泉が座っている。

二人の前には顔は暗く沈んでいるが、服装は明るく派手なヨネザキ・フミカ

(23) がいる。

フミカ「……最悪……マジ有り得ねー。なんでウチが狙われるワケー？」

正斗「立派な犯罪ですよ、誹謗中傷は」

フミカ「ハア？ 皆やつてるつしよ。てかこんな慣れてんじゃねーの、ゲーノージンは」

悪びれないフミカにムツとする正斗。

泉「……何でやったの？ 中でも貴女が一番酷かったらしいんだけど」

フミカ「……許せねーんだよ、不倫する奴全員。死ねばいいんだって、ウチの旦那もだけど」

思わず「そういう事か……」と溜息をつく正斗。

泉「じゃあ、赤ちゃん残してきたのはこの間に旦那さんが浮気しないようにする為？」

フミカ「そ、分かった？ お前頭いーじゃん。ま、この事件解決したら秒で離婚するけど。

もう弁護士も決めてるしー。ギャハハハッ！」

バカ笑いするフミカを睨む正斗。

そこへ和服姿で満面の笑みを浮かべ

た厳堂海次(72)が杖を突きながら

おぼつかない足取りで入って来る。

厳堂「……お久し振りですね、泉由妃警部補様」

泉「……随分老け込んだな、厳堂の親分さん」

厳堂「そちらはまた一段とお美しくなられて。

すっかり大事な孫娘の警護お願いしますよ、

塀の外にいる唯一の家族なんですからね」

泉「なら約束しろよ。裏で勝手に忍者退治して

東京湾とかに沈めたりしないってな、私の

旦那みたい……いくら世を忍んで生きる

隠密でも法の裁きは受けさせたいんでね」

鼻で笑いながらソファ―に座る厳堂。

正斗「(ムツとして) な、何が可笑しいッ！」

厳堂「証拠は有るんですか？ ご主人の件は。

それに分かるでしょう、この部屋を見れば」

ほつれたカーテンを指さす厳堂。

厳堂「今や時代の波に飲まれた難破船なんです、

この厳堂丸は。忍者退治なんてとても……」

泉「出来んだろ、コスプレ野郎一人殺すぐらい」

厳堂「無理ですよ。だって我々が一番怖いのは

忍者より本当の正義の味方の皆様ですから」

満面の笑みで微笑む厳堂。

泉「笑って済ませれると思うなよ、海賊が……」

そこへ泉のスマホに着信がある。

泉「……はい……エッ！ また犯行声明ッ？」

#### ○ 警察車両の車内（夜）

正斗と泉に警視庁に特別合同捜査本

部が置かれたという無線が入る。

正斗「……当然か、これだけ大事になれば……

てかマジで最悪でしたね、あのバカ悪魔女」

泉「……あなるわな、家族が皆塀の中じゃ

でも我慢しろよ正義バカ、顔に出てたぞ」

正斗「正直ムリです。てか海賊って何ですか？」

泉「厳堂の異名だ。内房総の漁師上がりでね、

若い頃トラブった漁師を海の上で魚みてー

に三枚に下ろしたって、満面の笑みで」

正斗「（顔を引きつらせて）マ、マジすか……

あ、あと、泉さんの旦那さんって……？」

泉「……昔厳堂関係の事件を追ってた刑事だ。

未だに行方不明だけどね……」

正斗「そうだったんだ……だから昨日あんな事

……てか警察が守るのは正義じゃないって

何が違うんですか？ 正義と秩序って」

泉「……秩序ってのは万人に共通の決まり事で、

正義は人や立場で全く変わる只の綺麗事だ。

だから何色でもないって思うんだ、正義色は」

正斗「……それは、そうかもですね……」

窓越しに街路樹の夜桜を見上げる泉。

泉「……綺麗だな……正斗、桜の花言葉って

何か知ってる？」

正斗「え、いや……」

泉「……『私を忘れないで』……だ。彼も根っ

からの正義バカでさ……普段は凄く優しい

んだけど何でも白黒付けたがる人でね……

だから気をつけるよ、正斗も」

正斗「え、何にですか？」

泉「……忍者ステイスを見れば分かんדר。

純白が常に正しくて美しいとは限らない、

人生を美しく彩るのはもつと優しい色だと

思うんだ、あの綺麗な桜色みたいな……」

正斗「そ、そうですか……」

泉「正義を守る為に白黒付けるのも勿論大事だ。

でも、私は白か黒しかない世界よりも大切な

人とずつと幸せを築いていける優しさに溢

れた安全な秩序色に守られていたいな……」

夜の都心に映える夜桜を眺めながら

優しい気に微笑む泉。

### ○ 駅・ホーム(夜)

線路上には警察官達がいて、その傍

にはブルーシートが掛けられた遺体。

ホームの柱には『乱善超悪 忍者ステ

イスより』の貼り紙が残されている。

### ○ 同・ロータリー(夜)

到着した車から降りる正斗と泉。

そこへベテラン刑事がやって来る。

ベテラン刑事「投身自殺かと思つたら例の貼り

紙があつてな。でも、白い鎖は無くてホーム

から突き落としただけみてーだ。どーやら今

回の猿芝居役者は使えねーらしいぞ、忍術は」

正斗「え、て事は模倣犯が遂に殺人まで……」

戸室のファンの犯行ですかね？ コレも」

泉「……いや、全く無関係の奴かもしれないよ、

忍者ステイスの真似して警察を混乱させて

逃げる時間を稼ぎたいだけのね」

ベテラン刑事「そーだ。でも、勘弁して欲しい

よなあ、このクソ忙しいのに模倣犯も増えて

これらちや。いくら忍者には分身の術がある

っていつてもよお。なあ正斗」

正斗「ハ？ 分身の術？ 何すかこんな時に」

ムツとしながら駅ビルの壁にある大

画面モニターに目を移す正斗。

画面には薬局での服毒自殺に似せた

模倣犯のニュース映像。場所は仙台だ。

薬局の壁には『乱善超悪 忍者スティスより』の貼り紙が残されている。

正斗「い、泉さん、アレッ！（と指をさす）」

泉とベテラン刑事がモニターを見る

と間もなく映像が切り替わり、今度は福岡の飲食店でも模倣犯が現れた事を告げるリポーターが映る。

正斗「……も、もうこんなにも模倣犯が……」

泉「……世を忍んで生きてた悪人達も皆相当鬱憤を、悪のマグマを溜めてたって事だな、今のビジネス正義戦隊ばっかの窮屈な時代に」

○ シティホテル・外観（夜）

そびえ立つ都内の高級ホテルの全景。

○ 同・廊下（夜）

険しい顔で歩く正斗と泉の背後には警察官に変装したユウスケとユウスケの母が歩いている。

ユウスケの母「……本当に大丈夫なんですか？」

泉「はい、家には応援の警察官でダミーの警備を置いています。犯人が狙うならそっちかと」

警察官のいる部屋の前で止まる一行。

正斗「では、こちらで暫くお過ごし下さい」

不安気に部屋に入るとすぐにドアを

閉めるユウスケとユウスケの母。

泉（溜息）すっかり被害者気分だな、二人共」

正斗「忘れてますね、自分も犯罪者だって事」

泉は「うーん」と大きく伸びをする。

泉「……じゃあ、今日は帰って明日も休むか」

正斗「え、いいんすか？」

泉「流石に大丈夫だろ、こんだけ警備置けば。」

忍者もヤクザには手は出せねーだろうし、

それに今日は疲れたしね……」

正斗「え、どうしたんすか？ らしくないすね」

泉「……疲れたってか混乱してるな、頭が……」

何が正義で何が悪魔で今自分達は何を守つ

てんだろなって。初めてだこんな日は……」

正斗「……確かに、そうですね……」

疲労感に満ちた顔で溜息をつく二人。

○ 正斗のアパート・外観（朝）

一夜明け、寝ぼけ顔の正斗がゴミの  
入った袋を持って階段を下りて行く。

○ ゴミの集積所（朝）

ゴミを出し終えてあくびをする正斗。  
その目線の先には保育園があり、その  
手前にある歩道には洒落た街乗り用  
のサイクリングウェア姿でクロスバ  
イクに跨ってフェンス越しに保育園  
を見ているカフェの店長の濔がいる。  
保育園の庭では満開の桜の木の傍で  
入園式が行われている。  
微笑みながら園児達を見ていた濔が  
正斗に気付いて会釈をする。

○ 歩道（朝）

保育園の前の歩道に置かれたベンチ  
で正斗と濔が座って話している。

濔「……え、彼女さん保育士だったんですか？」

正斗「はい……てか店長さん趣味なんですか？」

サイクリング」

濔「ええ、たまたまここで休憩してて」

正斗「そっか……続きますね、偶然が」

濔「ですね……じゃあ、次は何でしょうね？」

正斗「え、次って？」

濔「二度ある事は、とか言うじゃないですか」

正斗「あ……ならそうだな……（と考える）」

濔「（閃いて）あ、私誕生日6月なんですけど

彼女さんは？」

正斗「え……ご、5月ですけど……」

濔「（悔し気に）うわ、惜しい。やっぱ迷信か

……てか来月じゃないですか、楽しみですね」

思わず悲し気にうつむく正斗。

正斗「……じ、実は亡くなったんです、最近」

濔「え……す、すいません……ご病気です？」

正斗「……いえ……SNSの誹謗中傷が酷くて

耐えられずに自分で……彼女不慮の事故で

園児を死なせてしまったんで……」

澁「(途端に驚き、目を見開く)……め、迷信

じゃなかった。じ、実は私もなんです。私も保育士で、しかも事故で同じ様に園児を……」

正斗「驚いて顔を上げる)え、ほ、本当に?」

澁「はい……それで保育園を辞めて……でも、誹謗中傷は変わらず毎日続いて……それに、黒猫飼ってるからってアパートに『魔女』って落書きまでされたので半年前に実家に戻って来て……でも実家にも無言電話が……」

正斗「え、じゃ、じゃあ週刊誌に載った事……?」

澁「(涙ぐんでうなづく)……不慮の事故とはいえ悪いのは私です。だから親御さんからの言葉ならどんな内容でも聞き入れます……」

でも何で関係無い、攻撃する必要も資格も無い人達から責められなきゃいけないの……」

悲し気に涙を拭う澁を見つめる正斗。

澁「……おかしいですよ、いつから正義って人に恐怖を抱かせるモノになったんですか……怖かった、毎日毎日攻撃に怯えて……もうアレはテロです、無差別文字テロですよ」

沙央梨と同じ言葉にハッとする正斗。

正斗「わ、分かります……で、でも違う、偽物なんですそんな正義は。恐怖じゃなくて安心を抱かせるモノですから、本物の正義はッ!」

澁「……そのハズですよ、本来は」

正斗「はい、僕でよければ相談に乗りますよ、刑事……が、と、友達にいるんで」

澁「え、本当に? あ、ありがとうございます」

正斗「なんなら今からでも話聞きますよ。今日……も、仕事休みなんです」

澁「え、じゃあ……猫カフェでも行きませんか? 今日うちの店も休みなんです」

正斗「い、いいですねソレ。行きましょう」

ようやく笑顔を取り戻す二人。

### ○ 猫カフェ・外観

商店街にある猫カフェの全景。

### ○ 同・店内

正斗が楽し気に猫と戯れている。

漣はその様子をじっと見つめている。

正斗「(気付いて)……ど、どうかしました?」

漣「い、いえ、やっぱ、やっぱ似てるなって」

正斗「え、誰にですか?」

漣「……保育士さんです、私が子供の時の……

その先生すごく優しく、私その人の影響で

絶対に保育士になるって決めたんです」

正斗「そうなんだ……なら四度目の偶然ですね」

漣「はい。てか……初恋の人なんですけどね」

驚きの余り思わず猫を強く掴む正斗。

驚いた猫は正斗の手に噛みつく。

思わず悲鳴を上げる正斗。漣は笑う。

正斗「……ハ、ハハ……で、でも、店長さんは

全然似てないんですよ、俺の初恋の人に」

漣「え……(残念そうに)……そうなんだ」

正斗「はい……その娘ガチの犬派だったんで」

悪戯っぽくニヤける正斗。

漣「笑顔になって)……そうだったんですね。

流石にもう無いか、五度目の偶然は」

正斗「ですね……でも、偶然って正義と一緒にで

期待しちゃうと価値が減っちゃうモノだと

思いませんか? だから絶対有ると思います、

いつか忘れた頃に五度目の偶然も」

### ○ 正斗のアパート・外観 (夕方)

西日が当たるアパートの全景。

### ○ 同・部屋 (夕方)

正斗がドアを開けて帰って来る。

そこへハクが出迎えに寄って来る。

正斗はハクを抱き抱えてテレビをつ

けると沙央梨の写真盾を見つめる。

正斗「……沙央梨、俺は沙央梨の代わりにあの

人を偽物の正義から絶対守ってあげるよ

……沙央梨への罪滅ぼしの為にも……」

そこでテレビの夕方のニュースが昨

日の駅の模倣犯の続報を伝え始める。

テレビの音声「……列車に撥ねられた女性は

かつて受けた性被害の加害者の個人情報

SNSで公開した事があり、その復讐の……」

正斗「……何をバカな事を……行き過ぎた正義  
なんか振り翳さなきゃこんな事には……」

○ シティホテル・外観（夜）

明かりの灯る高級ホテルの全景。

○ 同・ユウスケの部屋（夜）

不安気な表情のユウスケの目の前の  
テレビ画面には昨日の薬局での模倣  
犯に関するニュースが映っている。

テレビの音声「……被害者の男性は煽り運転の  
加害者の犯行を顔が分かる状態で動画サイ  
トに投稿した人物で、それを逆恨みした……」

そこへ部屋に入って来たユウスケの  
母がテレビのニュースに気付く。

ユウスケの母「ちよ、ちよっと、何見てんのッ！」

慌ててテレビを消すユウスケの母。

ユウスケ「（声を震わせて）お、お母さん……  
ぼ、僕は正義の為にやったんだけだ。せ、正義の  
為に、よ、世の中の役に立つ為に……」

ユウスケの母「……う、うん、そうよ、そう」  
ユウスケ「お、お母さん。い、嫌だ。ま、まだ  
死にたくない。こ、殺されたくないッ！」

叫びながら母親に抱きつくユウスケ。

○ 厳堂組・外観（夜）

門や塀の前には組員達と警察官達が  
いて、共に警備に目を光らせている。

○ 同・寝室（夜）

不機嫌そうな表情のフミカが溜息交  
じりに煙草を消し、ベッドに横たわる。  
傍の椅子には笑顔の厳堂がいる。

フミカ「てかメチャ怖いんだけど、お爺ちゃん」  
厳堂「大丈夫だ。安心して寝なさい」

そこへ廊下から衝撃音が聞こえる。

咄嗟に悲鳴を上げ、うずくまるフミカ。

フミカ「怖えーよッ！ マジ怖えーってッ！」

厳堂「安心しろ、ワシが見て来てやるから」

微笑んで杖を突き、立ち上がる厳堂。

○ 同・廊下(夜)

笑顔の厳堂が部屋から出て来る。

組員が床に落としたり皿を拾っている。

厳堂「笑顔で」……その音か？ 今のは」

組員「(誤魔化し笑いで) はい、すいません」

それを見た厳堂は満面の笑みのまま

突然勢いよく組員目掛けて駆け出し、

杖で組員の頭をぶつ叩く。

厳堂「笑い事じゃねーんだよ、クソがーッ！

可愛い孫が怖がってんだろがーッ！」

笑顔で何度も杖を振り下ろす厳堂。

○ 泉の家・外観(朝)

朝日を浴びる一軒家の全景。

庭木の桜の花は散り始めている。

○ 同・ダイニング(朝)

泉が出勤の準備をしている。

そこへ保育園の制服姿の泉の息子が

またタブレットを持ってやって来る。

泉が覗き込むと忍者ステイスが悪魔

侍の首を白い鎖で締めているシーン。

泉「ダ、ダメッ！ こんな観ちゃッ！」

慌ててタブレットを取り上げる泉。

○ 警察署・刑事課(朝)

出勤してきた正斗が中年女性の犯罪

者を連れたベテラン刑事とすれ違う。

中年女性「(正斗に) うわイケメンだあ。私、

この刑事さんに取り調べて欲しいわあ」

ベテラン刑事「何バカな事言ってるんだ、行くぞ」

バッグからスナックの店名入りのマ

ッチを取り出し、正斗に渡す中年女性

中年女性「コレ私がバイトしてる店。時間あつ

たら来てえ。で、私のお務め終わったら会お」

ベテラン刑事「コラッ、早く来いッ！」

中年女性を睨みつけ、腕を引いて連れ

て行くベテラン刑事。

そこへ泉も出勤してくる。

正斗「お早うございます……アノ女何ですか？」  
泉「私文書偽造だ。男を騙す為に数人から戸籍を買って他人名義で婚姻届け出してたって」  
正斗「結婚詐欺か。戸籍買ってまでやるか……」  
泉「若い頃は履歴書も偽造して転職してたって何か消し去りたい過去があったんだろ……」

そこへ新人刑事が駆け寄って来る。

新人刑事「い、泉さん、テレビ見て下さいッ！」

奥にあるテレビには愛知にある小学校の中庭から中継するリポーターと校舎の脇に飾られた花が映っている。

リポーター「……亡くなった男の子は学校の備品を悪戯で破壊した生徒の事をSNSで拡散しており、それに怒った生徒から校舎の屋上から飛び降り自殺に見せかけて……」

そこで画面が切り替わり、屋上に残された『らんせんちようあく にんじゃステイスより』の貼り紙が映る。

平仮名の貼り紙を見て愕然とする泉。

泉「……こ、こんな子供まで真似を……」

正斗「……で、でも拡散なんかするからでしょ、SNSみたいなテロ道具悪用して」

泉「え……コレは悪用までいかないだろ。お前相当酔ってんじゃないか？ 正義酒に」

正斗「え、そ、そんな事ないっすよ」

泉「いや、酔い醒ましに情報収集がてらコーヒーでも飲んで来い、またファンの聖地行って」

○ カフェ・入口

ドアには『CLOSED』の札。

そこへスーツ姿の正斗がやって来る。

正斗「……え、何だよ……今日も休みか」

溜息交じりに帰ろうとする正斗。

そこへ店のドアが開き、漣が顔を出す。

漣「あの、よかったらどうぞ」

微笑んで嬉しそうに手招きする漣。

○ 同・店内

照明がまばらな薄暗い店内。

カウンターには書類が積まれている。

笑顔の漣が正斗にコーヒーを出す。

漣「どうぞ。今日は棚卸なんでサービスです」  
正斗「そうだったんですね。ありがとうございます」

そこへ黒猫のコクが書類に近づく。

漣「こ、こらコク、ダメッ！」

慌ててコクを抱いて降ろす漣。

その様子を微笑みながら眺める正斗。

漣「……お客様お仕事なんですか？ 今日」

正斗「え、ええ、ちよつと時間が空いて……」

漣「……公務員って、警察関係ですか？ 確か

刑事さんとお友達って……」

正斗「い、いえ……（慌てて考える）……友達

ってのは同じ大学だった奴の事です」

漣「あ、そうなんですね。でも、大した事して

くれないと思いますけど、警察頼っても」

正斗「え……いや、そんな事無いでしょ」

漣「実際そうでしたから、前に相談した時も。

でもしようがないか正義の味方じゃ。同じ

正義ですからね、行き過ぎた正義も」

正斗「え、いや、それは違う、違いますッ！」

漣「え……何で言い切れるんですか？」

正斗「エ？ い、いや……じゃ、じゃあ警察の

代わりに俺が、俺が店長さんを守りますッ！」

漣「え……ホ、ホントに？」

正斗「約束しますッ、何でも言っして下さいッ！

店長さんの為になる事があつたらッ！」

少し考えた後、何かを思いつく漣。

漣「……ホントにいいんですか？ 何でもって」

正斗「は、はい、大丈夫ですッ！」

漣「……じゃあ……呼んでもいいですか？

先生って」

思わず「え……」と固まる正斗。

漣「……ダメですか……？」

正斗「い、いや、全然いいけど……」

漣「やった。ありがとうございます、先生」

嬉しそうに微笑む漣。

正斗も照れ笑いを浮かべる。

漣「あ、その笑顔……ホント似てるあの先生に

……でも、もう私は呼んで貰えないんです

けどね、先生って……（悲し気にうつむく）」

正斗「そ、そんな事ないよ。また絶対出来るって。だって保育士って足りてないんでしょ」  
漣「無理です。ネットで名前調べればバレるし、保育園がなくても親が黙ってないですから」  
正斗「そ、そっか……」

正斗が残念そうにポケットに手を入れる……と、中年女性に貰ったマツチに気付いてハツとして取り出す。

漣「……何で人間ってネットや機械の構造には詳しいのに、人の心の構造には疎いんだろ。SNSも知らない人同士が繋がるシステムを作ればもつと人は幸せになるって予測で多分作ったんですよ。でもそれが幸せどころか不幸の始まりで、繋がった人の心のシステム不良までは予測出来てなかったから……」  
正斗「な、ならもう絶対繋がれないように変えればいいんだ名前は。こ、戸籍買ってさッ！」  
漣「(驚いて)え……こ、戸籍を……ですか？」  
正斗「そう。で、保育補助のバイト探せば？ 確か無資格で保育園で働けたんじゃない？」  
漣「え、ええ、確かにそうですけど……」  
正斗「保育士じゃないけど園児から見れば同じ先生だし、絶対呼んで貰えるよ、先生って」  
漣「で、でも良いんですか？ ソレって……」  
正斗「……ほ、本当はダメだと思う。でも同じ偽物でも恐怖を与える偽物の正義より全然マシでしょ、希望を与える偽物の名前の方が」  
漣「……そ、そうですね……考えときます」  
正斗「じゃあ、俺は戸籍買える人の情報を探り入れとくよ、友達の刑事に」

○ 正斗のアパート・外観(夜)

明かりの灯るアパートの全景。

○ 同・正斗の部屋(夜)

ドアを開けて正斗が帰って来る。  
そこへ白猫のハクが寄って来る。  
ハクを笑顔で抱き抱える正斗だがチエストの上にある沙央梨の写真盾が目に入った途端に真顔に戻る。

正斗「……沙央梨……ゴメン……俺はあの人に  
犯罪を勧めてしまった……俺は本物の正義  
の味方のハズなのに……でも、でも偽物の  
正義から守る為なんだ……だから、だから  
許してくれ、今回だけ……今回だけは……」  
ハクを降ろしてチェストの引き出し  
を開け、沙央梨の写真盾を隠す正斗。

○ 厳堂組・外観（朝）

物々しい雰囲気の堀の前には多数の  
組員達と警察官達の姿。

○ 同・リビング（朝）

厳堂が一人で朝食を食べている。  
テレビの朝のワイドショーには街頭  
で忍者ステイスのコスプレをしてい  
る若者達の様子が映っている。

それを表面上は笑顔で凝視する厳堂。  
そこへ組員がコーヒーを注ぎに来る。

厳堂（優しい笑顔で）「おお、ありがとな」

組員が出て行くとテレビ画面では

男性の若者がカメラ視線で叫び出す。  
若者「乱れた正義も悪もクソなんだってッ！

忍者ステイス様マジリスペクトっすーッ！」

厳堂は途端に満面の笑みのままコー  
ヒーをテレビにぶっかけ、そのままの  
勢いでテレビを蹴飛ばして破壊する。

○ 警察署・刑事課

泉がスマホでSNSを見ている。

『忍者ステイス様マジ神』『正義の隠  
密しか勝たん』『警察は既にオワコン』

『てか、正体誰？』等の投稿が並ぶ。

泉「……ヤベー信者共が出て来たな。何が神だ」  
そこへ正斗がやって来る。

正斗「でも分かります、すぐりたい気持ちには」  
泉「なに？ まだそんな事言って……」

そこでSNSに最新の投稿が入る。

『忍者ステイスの次の獲物は厳堂組  
とかいうヤクザらしい』という文章。

思わず「エッ！」と目を見開く泉。  
その後も次々に投稿が続く。

『確かに、組事務所前に警察いるね』  
『極道＋警察対忍者は激アツ』『忍者  
ステイス様のご尊顔拝みにいざ！』  
（厳堂組の場所の地図画像付で）等の  
投稿が並ぶ。

泉「ま、正斗、コレ見ろッ！」

慌ててスマホを正斗に見せる泉。

正斗「……え、マ、マジかッ！ 何で分かった  
んですかねッ？」

泉「考えるのは後だッ！ 早く行くぞッ！」

#### ○ 厳堂組・前の道

早くもやじ馬や信者が集まっている。  
マスコミも集まり始めていて、警備の  
警察官達と組員達の怒号が飛び交う。  
そこへ警察車両がやって来て血相を  
変えた正斗と泉が降りて来る。

泉「……マ、マズイなコレは……」

正斗「そりや変だつて気付くか、社会を守る

正義の味方が反社の悪魔を守ってたら……」

泉「正斗、中の様子見に行くぞ」

正斗は不満気な顔で溜息をつく。

正斗「……正直嫌なんすけど、悪魔の警護とか」  
泉「嫌でもそれが仕事だ。顔に出すな正義バカ」  
門へ向かう泉に渋々ついて行く正斗。

#### ○ 同・リビング

イラついた様子で煙草を吸うフミカ  
と窓際で外の様子を伺う厳堂がいる。  
そこへ正斗と泉が入って来る。  
途端にフン、と顔を背けるフミカ。  
思わずムツとして睨む正斗。

厳堂「笑顔で」……苦労様です。なんだか外が  
騒がしいが大丈夫なんですよね？」

泉「そのうち静まるだろ、ちゃんと規制すれば」

フミカ「鼻で笑う」嫌々に聞こえますけどー」

正斗「当然だッ！ 誰が好き好んでやるかッ！」

フミカ「……ハ、何言ってるの？ このヒト」

正斗「そもそもが間違ってたんだよ、社会の悪魔の女が偽物とはいえ正義ヅラしたのがッ！」

正斗を睨み、煙草の煙を吐くフミカ。

厳堂も笑顔は保っているが杖を持つ

手は怒りで震えている。

泉は正斗の腕を掴み、部屋を出て行く。

○ 同・廊下

険しい顔で正斗に詰め寄る泉。

泉「お前何度言ったら分かるんだッ！ ここはもういいからホテルの警備に行けッ！」

正斗「何ですかッ？ ヤクザは、悪魔は憎いでしょッ？ 泉さんだつてッ！」

泉「ソレとコレとは別だッ！ 相手は本物の

冷酷で凶暴な悪魔だぞッ！ 正義は必ず勝

つって信じてる奴程負けるぞ正義バカッ！」

正斗「わ、分かりました。むしろ嬉しいですッ！

こんな悪魔の巣窟に居たくないんでッ！」

吐き捨てながらその場から離れて行く正斗。

○ シティホテル・ユウスケの部屋

ユウスケとユウスケの母が不安気な

表情でソファアに座っている。

そこへスマホにメール。思わずビク

つくユウスケだが差出人は祖母だ。

ユウスケ「……何だよ、お祖母ちゃんか」

ユウスケの母「そう、何だつて？」

ユウスケ「もうすぐ差し入れ持って来るって。

ロビーまで貰いに行つて来てもいい？」

ユウスケの母「え、部屋に来て貰えば？」

ユウスケ「大丈夫でしょ、ホテルの中なら」

ユウスケの母「じゃあ、私が貰ってくる」

ユウスケ「自分で行くよ。お祖母ちゃんも気分

転換した方が良いつて。顔見たいらしいし」

ユウスケの母「……じゃあ一緒に付いて行って

貰つてね、警察の人に」

○ 警察車両の車内

イラついた表情で運転する正斗。

○ シティホテル・廊下

ユウスケがそつとドアから顔を出す。  
笑顔で出迎える新人刑事と警察官。  
新人刑事「では、ロビーまでお供しますね」

○ 同・エレベーター

ドアが開き、他に乗員はいないものの  
警戒しながら乗る新人刑事と警察官  
を不安気に見るユウスケ。

ユウスケ「……け、刑事さん、銃持ってますか？」  
新人刑事「(微笑んで)もちろん。見てみる？」

動き始めたエレベーターの中でドヤ  
顔で腰の拳銃を見せる新人刑事。

ユウスケ「う、うわ、ヤバ。すげー」

新人刑事「だから心配しないで。忍者ステイス  
が襲って来ても大丈夫だから、絶対に」

微笑み合う新人刑事とユウスケ。

そこで突然、天井の非常扉の隙間から  
何かが鋭く落ちてきて新人刑事と警  
察官の首に突き刺さる。白い吹き矢だ。  
途端に意識を失い、倒れる新人刑事達。

ユウスケ「(驚いて) え……け、刑事さんッ！  
ど、どうしたんですかッ？」

そこで非常扉が開き、天井の防犯カメ  
ラを破壊しつつ白い影が颯爽と飛び  
降りて来る。忍者ステイスだ……と、  
その背後からも白い影、忍者ステイス  
がもう一人飛び降りて来る。

ユウスケ「……え、ぶ、分身の術……？」

ユウスケを睨みつけながら非常停止  
ボタンを押す一人目の忍者ステイス。  
二人目の忍者ステイスはシニア向け  
のスマホをユウスケの足元に投げる。

ユウスケ「……え、こ、このスマホって……お、  
お祖母ちゃんのじゃ……」

ユウスケの顔は迫り来る二人の忍者  
ステイスを前に青ざめていく。

○ 同・廊下

焦りの表情のユウスケの母と警察官  
Aが走っている。

ユウスケの母「ほ、本当なんですか、それはッ？」  
警察官A「はい、息子さんも止まったエレベーターの中に閉じ込められてるようですッ！」

○ 同・エレベーターホール

警察官やホテルの従業員が集まっている中、ユウスケの母がやって来る。そこでエレベーターの扉が開く。床には倒れた新人刑事と警察官。その上には……ユウスケの首吊り遺体。思わず悲鳴を上げ、その場に崩れ落ちるユウスケの母。  
ユウスケの遺体にはやはり『乱善超悪忍者ステイスより』の貼り紙。

○ 同・ボイラー室

人気の無い薄暗いボイラー室。そこへ忍者ステイスの一人が駆け込んで来て頭巾を取ると……諒だ。急いで用意してあった清掃業者の制服に着替える諒。  
遅れて二人目の忍者ステイスも入って来て、リネン用のカートの中に入り、シートを被って身を隠す。

○ 同・地下駐車場

カートを押す清掃業者姿の諒が白いミニバンの背後まで来て止まる。  
諒「(周囲を見回す)……もういいぞ、出て」  
カート内のシートを跳ね除けて出て来たのは着替え終えた……濡だ。  
諒は素早く運転席に乗り込む。

諒「早く乗って、濡姉ちゃん」

うなづき、急いで助手席に乗り込む濡。  
諒「……後はラスボスだけだな、これで」  
薄ら笑い、車のエンジンをかける諒。

○ 警察車両の車内

運転席の正斗の目線の先にはシティホテルが見える。

そこで忍者ステイスの出現とユウスケの死に加え、ユウスケの祖母のスマホが盗まれていたという無線が入る。

正斗「エッ！ マ、マジか……クソッ！」

悔し気にハンドルをぶっ叩く正斗。

そこへホテルの地下駐車場から白いミニバンが出て来る。

正斗は帽子にマスク姿の漑と諒が乗っているのに気付く。

正斗「え……ア、アレって熊ヶ瀬じゃ……？  
て、てか一緒に居るの……店長さん……？」

○ 厳堂組・前の道

見回り中の泉がスマホで話している。泉「な、なにッ、又マベが忍者ステイスにッ？  
分かったッ！ すぐ行くッ！」

○ 警察車両の車内

険しい表情の正斗の目線の先には白いミニバンが大通りの角を曲がって狭い裏道に入って行くのが見える。

○ レンタルガレージ

ミニバンがガレージの前で停車する。車から降りた漑がシャッターを開け、諒がガレージ内にミニバンを停める。漑がシャッターを下ろし始めると諒も車から降りて忍者ステイスの衣装や忍術用具を降ろし始める。シャッターは閉まりかける……が、身を屈めた正斗が滑り込んで来る。

諒「（驚いて）だ、誰だお前ッ！」

漑「（気付いて）え、せ、先生ッ！」

諒「え……し、知ってるヒト？」

漑「うん。カフェのお客さんで、公務員の人」  
立ち上がった正斗は諒が手にしている忍者ステイスの衣装に気付く。

正斗「……に、忍者ステイスだろ、ソレッ！」

澁は慌てて作り笑顔を浮かべながら  
忍者ステイスの衣装を隠す様に正斗  
と諒の間に入る。

澁「……せ、先生、も、勿論フェイクですよ。  
カ、カフェに置いてた物で……」

正斗は構わず諒に近づこうとする。

正斗「く、熊ヶ瀬諒さんですよ。悪魔侍の  
さ、さつきホテルから出てきましたよね？

あ、貴方が忍者ステイスだったんですね」

慌てて正斗を制する澁。

澁「せ、先生、だから偽物だって……」

正斗「て、てか店長さん、貴女はどうしてッ？

何で、何で一緒にいるんですかッ？」

澁「そ、それは……（と言いつつ諒を考へる）」

諒は傍にあつたボールを持ち上げる。

澁「え……諒、な、何する気ッ？」

諒「しょ、しょうがねーだろ、こうするしか」

澁「や、やめて諒ッ！ 先生は、先生は私を守  
つてくれるって約束してくれた人なのッ！

諒を話せばきつと分かってくれる。なんなら  
味方になって貰おうッ！」

諒「え、マジか澁姉ちゃん……」

澁「先生、先生も彼女さんを誹謗中傷のせいで  
亡くしたんですよね？ だったら私達と一

緒に倒しませんかッ？ 乱れた正義をッ！」

正斗「え、て、店長さん、何言つて……」

澁「お願い先生ッ！ 話を聞いて下さいッ！」

困惑しながらも考える正斗。

正斗「……わ、分かりました。ならソレは……」

諒の持つボールを指さす正斗。

澁「……諒、お願い」

澁「……うなづき、ボールを床に置く諒。

澁「……じ、実は太玖磨……に、忍者ステイス  
を演じていた戸室太玖磨……私と諒と同

じ空手教室に通ってた幼馴染なんです……」

正斗「え……幼馴染……？」

澁「はい……太玖磨は凄く優しい子で私が保育  
園を辞めた時も凄く心配してくれて……そ

れで紹介してくれたんです、カフェの仕事を」

正斗「そ、そうだったんだ……」

「濡」で、でも誹謗中傷で苦しんでたのは太玖磨も一緒だったのに、私は太玖磨に何も、何もしてあげなくて……だから、だからせめて乱れた正義に太玖磨と同じ苦しみを……」

諒「本当の姉弟みたいな関係だったんだ、太玖磨と俺達はッ！ だから仇討ちを……分か

るだろ、貴方も同じ想いしたんだっただらッ！」

正斗「で、でもそれだけで殺人なんか……」

諒「いいんだッ！ 正義の、正義の味方にッ！

正義のヒーローになれるんだっただらッ！」

思わず「え……？」と眉を顰める正斗。

諒「……子供の頃からの夢だったんだ、俺の。

それで空手も始めたし、現実の悪を倒す為に

警察にも入った。でも銃の暴発事故起こして

一般人に怪我を……しかもそれがネットで

広がったから世間から袋叩きに遭ったんだ。

お前は正義の味方失格だ、悪魔だっただらッ！

だから、だから自分から警察を辞めざるを得

なくなつて……でも、転職しようにもあの、

あの事故のせいで中々出来なくて……」

濡「で、諒も仕事紹介されたんです、太玖磨に」

諒「最初は喜んだ、夢だった正義のヒーローに

なれるんだって……でも、でもやっぱ事故の

せいで俺だけいっつも悪役ばっかで……で、

そんな時に太玖磨があんな事になって……」

濡「それで決めたんです。私達が忍者ステイス

に、正義の隠密になつて復讐を……」

正斗「わ、私達つて……て、店長さんも……？

て、て事は忍者ステイスはふ、二人……？」

諒「そうだッ！ 警察じゃ手に負えないだろ、

乱れた正義はッ！ でも、でも今の俺達なら

出来るッ！ 俺は正義のヒーローだ、今でも

正義の味方だ、悪魔なんかじゃねーんだッ！

それに俺は許さない、太玖磨を叩いて、俺の

事故も叩いた乱れた正義の、偽りの正義のス

ーツで着飾ったビジネス正義戦隊共をッ！」

濡「わ、私だつて許せない……私は、私は子供

達の聖母なの、魔女なんかじゃないッ！

先生お願いですッ！ 仲間にならなくても

いいッ！ 黙ってさえいてくれればッ！」

正斗「で、でも絶対バレますよ、いつかッ！」  
諒「あと一人なんだ。あと一人残った乱れた正義を殺るだけだッ！　それが済めば計画は終了だ、それ以上無駄な殺しはしないッ！」

正斗「む、無駄って……何人も殺しといて……逃げ切れる訳ないでしょ、殺人犯がッ！」

諒「違う、これは殺人じゃない、聖戦だッ！

それに警察に捕まって乱れた正義に甘い今の法律に従うなんて絶対嫌だッ！　俺達に従うのは正義のみ、それが正義に忠義を尽くす正義の隠密だッ！　それに三人も殺せば死刑だろッ！　悪いのはビジネス正義戦隊共だ、俺達が罰を受ける筋合いは無いッ！　俺達は絶対に、絶対に勝ち抜くからなッ！　乱れた正義を滅ぼす為の聖戦になーッ！」

諒は血走った目でまたボールを握る。

濡「りよ、諒ッ！　やめてーッ！」

諒に駆け寄り、羽交い絞めにする濡。

正斗「わ、分かった……でももうやめて下さい」

思わず「え……？」と動きを止める濡

と諒。

正斗「……今日の事は忘れます、もう、もう復讐はやめるって約束出来るなら」

諒「な、なに言ってるんだ、まだ一人……」

正斗「(遮って) もう十分でしょッ！　それに最後の一人は今ヤクザの事務所だッ！

絶対に無理だ、返り討ちにされますよッ！」

諒「え……な、何で知ってるッ？」

正斗「え……あ、ネ、ネットで見たんで……」

思わず顔を背けて誤魔化す正斗。

諒は悩まし気な表情で濡を見る。

濡は「まだダメ……」と首を振る。

うつむき、暫く考える諒。

祈るような目で諒を見つめる濡。

諒は考え終えるとゆっくり顔を上げ、手を震わせながらボールを離す。

諒「……黙っててくれるんだな？　本当に」

思わず「え……？」と驚く濡。

正斗はためらいながらもうなづく。

○ レンタルガレージの前の道

ガレージから正斗が一人で出て来る。  
うつむき加減でポケットをまさぐる  
とスナックのマツチが出てくる。  
暫くマツチを見つめるも、やさぐれた  
様子で道端に投げ捨てる正斗。

○ レンタルガレージ

険しい顔で諒に詰め寄る漣。

漣「諒ッ、何でッ？ 何でやめるのッ？」

諒「……どうせ近づけねーだろ、厳堂組には」

漣「だ、だから私は一番目にしようって……」

諒「……いるか？ 第一話から闇の組織のアジ

トに乗り込んで行く正義のヒーローが……

でも中止して一旦離れるだけだ、東京から」

漣「え、じゃあ先生にもその事を……」

諒「知らせなくていい、何も言わず消えるんだ」

漣「エッ！ そ、そんなッ！」

諒「あの人にとつても楽だろ、そのほうが……

カフェも誰かに任せればいい、明日にでもな」

答えず、悲し気にうつむく漣。

○ 厳堂組・前の道（夜）

明かりの灯る門の前に警察車両が到  
着し、戻って来た泉が降りて来る。

門では警察官Bが帽子にマスク姿の

配達業者から封筒を受け取っている。

泉「(警察官Bに)……どう？ 異状無いか？」

警察官B「はい、変わりありません」

泉「戻って来てない？ 正斗は」

警察官B「いえ、こちらには……」

泉「(舌打ちして)どこ行ったんだアイツ……」

警察官B「あの、組長宛てにメール便が……」

泉「了解、渡して来る」

封筒を受け取ると、不審物が入って  
いないか調べながら玄関へ向かう泉。

○ 同・リビング（夜）

フミカと厳堂がテレビを見ている。

泉が入って来て封筒を厳堂に渡す。

泉「組長宛てだ。只の書類みたいだけどな」

泉が部屋から出て行くのを見届けてから封筒を開けた厳堂が思わず驚く。中には写真が数枚あり、フミカの夫のレオと不倫相手の女がラブホテルから出て来る写真。フミカが弁護士事務所所に入って行く写真。フミカが母の顔で赤ん坊を抱っこしている写真など。封筒には写真と一緒に一枚の手紙も入っていて、『私は組長の孫娘の全てを知っている。ひ孫に初めての誕生日を迎えさせたかったら今すぐ孫娘を組事務所から出せ。警察と他の組員には内緒でな。忍者ステイスより』と書かれている。

厳堂の隣で手紙を覗き見していたフミカが思わず悲鳴を上げる。

咄嗟にフミカを抱き寄せる厳堂。

厳堂「笑顔で」大丈夫だ、ワシが付いてるッ！クソッ、コスプレ忍者野郎がッ！ 極道を脅

迫するとはいい度胸してんじゃねーかッ！」

フミカ「は、早くここ出ないと、早くッ！」

厳堂「……じゃあ裏口から出てタクシー拾って

……そうだな、友達の家にも行きなさい」

フミカ「エッ！ う、家に帰りたいッ！」

厳堂「ダメだ危ないッ、忍者の思うツボだッ！」

フミカ「で、でも……」

厳堂「大丈夫だッ！ マンションは一門の親分衆に頼んで絶対に守ってやるからなッ！」

○ 同・裏口（夜）

厳堂が手招きで警備中の組員を呼ぶ。組員が裏口から離れた隙に男物の服と帽子で男装したマスク姿のフミカが出て行き、暗い夜道を走って行く。そこへタクシーが通りかかる。気付いて思わず両手を上げて止め、タクシーに飛び乗るフミカ。

○ 同・門（夜）

そんな事とは知らずに警備を続ける  
泉と警察官達と組員達。

○ タクシーの車内（夜）

タクシーが幹線道路を曲がって電灯  
が無く、人気も無い倉庫へ入って行く。

フミカ「……ハ？ ちよつと、どうしたのッ？」

答えない運転手の下半身は先程のメ  
ール便を届けた配達業者のパンツ姿。  
帽子のひさしを上げてバックミラー

を覗き見る運転手は……変装した諒。

フミカ「ちよ、ちよつとッ！ 聞いてんのッ？」

無視してタクシーを停める諒。

フミカ「え、な、なにッ？ ココどこよッ？」

諒は後部座席のドアを自動で開ける  
と隠し持っていた忍者ステイスの頭

巾を被り、白い鎖も握って車を降りる。

途端にフミカの顔が青ざめていく。

フミカ「……に、に、に、忍者ステイス……」

後部座席で固まったままのフミカを

睨み、白い鎖を広げて襲い掛かる諒。

そこで突然の轟音、運転席の窓が粉碎。

フミカの手には……：……：……：拳銃だ。

フミカ「ヤ、ヤクザの孫ナメんじゃねーぞッ！

し、死ねッ！ コスプレ忍者野郎がーッ！」

拳銃を諒に向けたまま、手も足も震わ

せながら車から降りるフミカ。

諒は鎖を握りながら間合いを取る。

フミカ「どうした？ ビビってんのか忍者ッ！

てかそんな鎖でどーやって銃に勝つ気ッ？

ほら縛ってみろよ、変態正義野郎がーッ！」

バカ笑いしながら挑発するフミカ。

諒は動じず隠し持っていた白い手裏

剣をフミカの手首めがけて投げる。

見事に命中し、悲鳴を上げるフミカの

手から拳銃が離れ落ちる。

諒はすかさず地面に落ちた拳銃にも

手裏剣を当てて遠くへ弾き飛ばす。

途端にフミカの顔はまた青ざめて、力  
が抜けたようにその場にへたり込む。

フミカ「……マ、マジか……お、終わった……」

諒はまた鎖を広げてフミカを睨みつけながらにじり寄って行く。

そこへ数台の黒塗りの車が猛スピードで倉庫に突っ込んで来る。

停車した車から降りて来たのは……満面の笑みを浮かべて杖を振り回しながら威風堂々と歩く巖堂だ。

○ カフェ・入口（朝）

一夜明け、曇り顔でカフェにやって来た漑が郵便受けを開けると中には漑宛ての封筒が一通入っている。

○ 東京湾の埠頭（朝）

朝日に照らされる一台のタクシー。

その傍には泉と大勢の警察官がいる。

地面には忍者ステイスの白い頭巾とブルーシートが被された遺体。

ブルーシートからはみ出た手の甲には見覚えのある大きな火傷の痕。

周辺にはマスコミ達もいて、テレビのリポーターが中継をしている。

リポーター「……死亡した男性は俳優の熊ヶ瀬諒さんで、タクシー会社から盗んだ車の車内には練炭コンロと忍者ステイスの正体は自分だと書かれた遺書があり、大阪の事件も映像を加工して時間を細工したと……」

泉「お、おい正斗、どこ行つてたッ？」

正斗は構わずにブルーシートの端をめくり、遺体が諒だと確認した途端にその場から駆け出して行く。

泉「オ、オイッ、どこ行くんだ正斗ッ！」

○ カフェ・店内（朝）

開店前の店内のテレビには埠頭の様子を伝えるニュースが映っている。カウンターには突っ伏して号泣する漑がいる。

心配気に濡に擦り寄り寄る黒猫のコク。  
濡の傍には郵便受けに入っていた封筒と手紙が置かれている。手紙には『濡姉ちゃんゴメン。俺一人で厳堂組へ行き、最後の乱れた正義を殺ってその足で自首します。この手紙は処分して警察が来たとしても何も知らないとだけ言うように。先生って人も濡姉ちゃんの事は警察には売らないと思うし。もう普通に会う事は出来ないと思うけど、乱れた正義を滅ぼして誇り高き正義のヒーローのまま死ぬなら本望です。諒』という文章。そこへ濡のスマホに着信がある。画面には電話番号と『先生』の文字。顔を上げた濡の目線の先のテレビには警察の腕章を付けた正斗がスマホを掛けながら生中継中のリポーターの背後を通過する様子が映っている。思わず「え……」と愕然とする濡。

○ 厳堂組・前の道（朝）

警備の警察車両が続々と離れて行く。

○ 同・事務所（朝）

若い組員達が真剣な表情でPC作業をしている。

画面には諒のSNSにアップされた画像が何枚も表示されている。

その背後には厳堂が満面の笑みで仁王立ちしている。

厳堂「俳優一人で三人も殺せるハズがねえッ！必ず共犯者がいるッ、絶対に探し出せッ！」

机の上の大きな木箱を開ける厳堂。

厳堂「久々に海に出るか……ここを警察なんぞに警備させた恥の落とし前をつけにな……」

木箱の中身は巨大な出刃包丁である。

それを満面の笑みで天に掲げる厳堂。

○ カフェ・入口（朝）

泣き腫らした顔の漣がドアを開ける。  
ドアの前には息を切らした正斗。

正斗「デ、テレビ見てたら熊ヶ瀬さんがって  
……だ、大丈夫？ 今日仕事休みで……」

漣「(遮って)逮捕しに来たんですか？ 私を」  
思わず「え……」と固まる正斗。

漣「……やつぱり警察の方だったんですね……  
さっき映ってましたよ、テレビに」

言葉を失ったまま立ち尽くす正斗。  
漣「だったら逮捕して下さい、厳堂も」

持っていた諒の手紙を差し出す漣。  
受け取って読み、愕然とする正斗。

漣「……自殺じゃないですから、諒は」  
正斗「だ、だったら早く逃げないとッ！ すぐ

に襲いに来るぞ、厳堂が、海賊が、悪魔がッ！」  
漣「え……で、でも逃げるってどこへ？」

正斗「ど、どこでもいい……逃げよう、二人で」  
思わず「え……」と驚く漣。

正斗「ど、どうせ警察だってすぐに気付くッ！  
逮捕されれば共犯者だって多分死刑だッ！  
どつちにしろ生き残れはしないッ！」

漣「で、でも先生は警察の……」  
正斗「(遮る) や、辞めるよ警察はッ！ 結局

報告出来なかったんだキミの事ッ！ 所詮  
オセロだったんだ俺の正義感なんてッ！

自分でも驚いた。こんなに、こんなに簡単に  
裏返るなんて……だから、だから俺に刑事を

続ける資格なんて無いんだッ！ でも、もう  
二度と偽物の正義の為に命を失う人だって

見たくないッ！  
漣「せ、先生……」

正斗「一緒に逃げよう……で、戸籍を買うんだ」  
漣「え……」

正斗「行こう過去を消せる場所へ。もう正義の  
隠密なんかになる必要の無い場所へッ！」

漣「……ほ、本当にいいんですか……？」  
正斗「守るって約束しただろ……俺は見つけた

んだ、正義よりも秩序よりも守りたいモノを」  
漣「せ、先生……」

正斗「……タクシー呼ぶから、荷物まとめて」

目を潤ませながら微笑み、うなづく漣。

○ 厳堂組・門

車に乗り込むフミカを見送る厳堂。

厳堂「……フミカ、すぐに戻って来るんだぞ。

共犯者がいる可能性が高いんだからな」

フミカ「大丈夫、子供たん迎えに行くだけだし。

やっぱ一緒に居た方が安心だかんねー。あ、

あと帰りに弁護士事務所にも寄ってくから」

厳堂「そうか、じゃあ気を付けてな」

フミカ「りょかい。じゃあねー」

フミカを乗せた車に続いて護衛の車

も門から出て行く。

そのすぐ後にも黒塗りの車が右へ左

へと何台も出て行く。

それを満足気な笑顔で見送る厳堂。

○ タクシーの車内

助手席に正斗、後部座席には漣がいて、

コクのいるゲージを大事そうに抱え

ながら窓の外を眺めている。

そこへ高くそびえ立つフミカのタワ

ーマンションが遠くに見え始める。

漣はハッと気付くと思わずポケット

に入れていた諒の手紙を取り出す。

暫く見つめた後、滲み出た涙を拭い

ながら手紙をまたポケットに戻す漣。

そこで漣の実家の前に到着する。

残った涙も拭い切り、急いで降りる漣。

○ 漣の実家・漣の部屋

駆け込んで来た漣が急いでスーツケ

ースを開け、クローゼットに向かうと

服を掴んでスーツケースに入れる。

端にあるビジネススーツを見てハッ

とするもスーツも掴んで投げ入れる。

○ 同・前の道

正斗がトランクを開けたタクシーの

前で待っている。

そこへ漕が戻って来ると急いでスーツケースをトランクに入れてまたタクシーに飛び乗る二人。

○ タクシーの車内

窓の外を見ていた漕が正斗のアパートの近くにある保育園に気付く。桜の木の下で楽し気に遊ぶ園児達を見た漕の顔に一瞬笑みが戻る。そこで正斗のアパートに到着する。タクシーから降りて階段を駆け上がる正斗を後部座席から見つめる漕。

○ 正斗のアパート・正斗の部屋

急いで駆け込んで来た正斗に驚いて何事かと警戒する白猫のハク。

正斗は乱暴にチェストを開ける……

と、以前引き出しに隠した沙央梨の写真を見つけて思わずハツとする。

正斗「……さ、沙央梨……ゴ、ゴメン……もう仇は取れないんだ……でも……警察辞めれば俺は、俺の正義は本物じゃなくなるのか……偽物だ、沙央梨を殺した偽物の正義だ。お、俺がずっと、ずっと嫌っていた偽物の……でも店長さんは……ど、どうすればいいんだ俺は……俺は……どうすれば……」

正斗は悩まし気に目を閉じるとそのままその場に膝から崩れ落ちる。

○ フミカのマンション・家のリビング

都心の景色が広がる最上階の窓辺に赤ん坊をあやす夫のレオがいる。

そこへスマホに非通知で着信がある。

レオ「(訝し気に)ん、誰だ……? はい……」

女性の声「レオ? 私だけど」

レオ「え、誰?」

女性の声「私だつて。てか忍者ステイス死んだ

じゃん、嫁戻って来んの?」

レオ「え、お前か……? なんだよ非通知で」

女性の声「バレたらヤバいっしょ、私つて」

レオ「まーな。てかフミカ一瞬だけ子供迎えに帰って来るけど。やっぱ一緒に居たいって」  
女性の声「え、じゃあもう子供の世話しなくてもいいってこと？ なら会わない？ 子供預けたらいつものホテルでさ」

レオ「え、マジ？(だらしない顔でニヤける)」

○ 同・前の道

フミカの車と護衛の車が到着する。

○ 同・家の玄関

フミカと護衛の組員達がやって来る。

フミカ「(組員に)もういいよ。車で待ってて」

頭を下げて離れて行く組員達。

フミカが玄関の鍵を開け、ドアも開けると赤ん坊を抱いたレオが作り笑顔で待っている。

フミカ「あ、ママでしゅよー。寂しかったー？」

レオから強引に赤ん坊を奪うフミカ。

レオ「じゃ、じゃあちよつと出かけてくるわ」

フミカ「……ハ？ てか早速女と遊ぶ気？」

レオ「ち、ちげーよ。仕事の打ち合わせだって」

誤魔化し笑いで出て行くレオ。

フミカ「……ま、もーいーけど、勝手にすれば」

そこへフミカのスマホに未登録の番号から着信がある。

フミカ「……ん？ 誰だろ……はい……」

女性の声「……あの、弁護士事務所の者ですが」

○ 正斗のアパート・前の道

先程までとは違い、ゆつくりとした足

取りの正斗がタクシーに戻って来る。

曇り顔で窓越しに後部座席を覗き込む……

……が、濡の姿は無い。

思わず「え……」と驚く正斗。

そこで正斗に気付いたタクシーの男

性運転手が運転席から降りて来る。

運転手「あの、お連れ様は急用が出来たとかで

別の車呼んで行かれましたが……」

正斗「え、きゅ、急用……？」

運転手「はい。それと……その猫の事を頼むと伝えてくれと……」

後部座席に残されたコクのいるゲージを見た途端にハッとする正斗。

○ フミカのマンション・前の道

一台のタクシーが停車する。後部座席にいる乗客は髪の高い女性のようにだ。

○ 同・家のリビング

インターホンの音が鳴る。

赤ん坊をあやしながら出るフミカ。

フミカ「……はい、なんですかー？」

女性の声「先程の弁護士事務所の者ですが……」

○ 同・エントランス

自動ドアが開いて中に入って行く

長い髪の女性の後姿。

○ 同・家の廊下

玄関からリビングに向かうフミカの背後を歩く長い髪の女性の後姿。

フミカ「(前を見ながら) もー、わざわざ来て

くれるなんてマジ神だわー。てか、いつもの

センサーは一緒じゃないの？」

微笑みながら振り返ったフミカの前にいるのは………漣だ。

ビジネススーツ姿で長髪のウィッグ

を外し、バッグから素早く忍者ステイ

スの白い頭巾を取り出して被る漣。

思わずギョッと目を見開くフミカ。

漣「……バカな旦那だな、簡単に騙されて……

同じ不倫でも大違いだ、太玖磨とは……」

バッグから白い鎖も取り出す漣。

フミカは咄嗟に悲鳴を上げながら

ルーフバルコニーへ向かって逃げる。

漣は素早く懐から白い撒菱まきびしを取り出

してフミカの足元に投げ散らす。

フミカ「イ、イテーツ！」

足を引きずりながらも必死に逃げる  
フミカに追いついた漣はフミカの頭  
目掛けて鋭く空手の蹴りを繰り出す。  
見事に命中し、気絶しながらバルコニ  
ーの壁際までぶっ倒れ飛ぶフミカ。  
漣は横たわるフミカに近づくと、見下  
ろしながら白い鎖を広げる。

漣「……やつと、やつとだよ。太玖磨、諒……  
ようやく滅びる時が来たよ、乱れた正義が」  
鎖を持つ手を震わせながら屈み込み、  
フミカの首に白い鎖を巻きつける漣。  
そこへマンションの管理人にドアを  
開けて貰った正斗が駆け込んで来る。  
気付いて咄嗟に振り返る漣。

正斗「や、やめろッ！ やめるんだ……」

警察手帳を掲げて漣に拳銃を向ける  
正斗。手は震え、目は涙で潤んでいる。

正斗「……偽物の正義は許せない。でも犯罪を  
許す理由にはならないッ！ 絶対、絶対ダメ  
だ犯罪はッ！ 人殺しはッ！ どんな、どん  
な理由があつたとしても……」

一瞬動きを止めた漣だがその血走つ  
た目は我を忘れた魔女の様に鋭く、  
怪し気な光を放って正斗を睨み返す。

漣「……違う、コレは、コレは人殺しじゃない、  
聖戦だーッ！」

叫んで鎖ごとフミカを引っ張り上げ、  
勢いよく塀の外へと投げ飛ばす漣。

フミカは気を失ったまま落下し、地面  
に強く叩きつけられて絶命する。

愕然としてその場に立ち尽くす正斗。  
漣は何度も大きく息をつくとうや  
く我に返り、おもむろに頭巾を取って  
立ち尽くす正斗を真つすぐ凝視する。

漣「……守るって……守るって言ったのに……  
結局守ってくれないんですね、私の事も……」

漣は思わず溢れ出てきた涙を拭くと  
塀によじ登って飛び降りようとする。

正斗「ま、待てッ！ やめろーッ！」

咄嗟に駆け寄り、漣の体を掴む正斗。

滯「は、離してッ！ 捕まって法に従うなんて絶対嫌ッ！ 私が従うのは正義のみ、それが正義に忠義を尽くす正義の隠密なの―ッ！」

正斗「ダメだッ！ そんな勝手は許さないッ！ そんな不埒な思想は忠義なんかじゃないッ、正義でも悪でもない只の無秩序だ―ッ！

俺は、俺はやっぱ刑事だッ！ 社会を守らなきゃいけないんだッ！ 社会を偽物の正義も悪もない皆が安心して暮らせる色に染め上げなきゃいけないんだッ！ 白でも黒でもない安全な秩序色に―ッ！」

滯は正斗に強引に引きずり下ろされるところのままその場に泣き崩れる。

肩で息をしながらその様子を眺める正斗の目からも涙が溢れ出てくる。

そこへ遠くから聞こえ始めた警察車両のサイレンが徐々に近づいて来る。

○ 警察署・前の道（夜）

街灯の灯る歩道には大勢のマスコミと忍者ステイスのコスプレ姿で滯の解放を訴える叫び声を上げる信者達が押し寄せている。

そこへ捜査員達に囲まれた滯が署内から出て来て移送用の車に乗り込む。一斉にカメラのフラッシュがたかれ、信者達の滯を励ます声と警察を罵倒する怒号が合わさって騒然となる。

○ 戸室太玖磨の実家・外観

春の日差しを浴びる一軒家の全景。駐車場には警察車両が停まっている。

○ 同・リビング

神妙な表情で座っている正斗の前には涙目でアルバムを眺める太玖磨の父と太玖磨の母がいる。

太玖磨の母「涙を拭う）……まさか、まさか、あの二人が……滯ちゃんと諒くんが……し、信じられません……」

アルバムには子供の頃の太玖磨と澪と諒が空手の道着姿で仲良さ気に写っている写真がある。

太玖磨の父も涙を拭いながら開いたままのアルバムを正斗に渡す。

太玖磨の父「……きつと、きつと恩返しのものもりだったんだ……澪ちゃんも諒くんも昔は体が小さくて空手教室の上級生に虐められて……それを、それを昔から正義感の強かった太玖磨が助けたから……わ、私には、私には全く分からないッ！今の、今の時代の正義の正解が一体何なのかッ！」

黙ったままアルバムを凝視する正斗。澪は屈託のない笑顔で微笑んでいる。

太玖磨の母「……諒くんは戦隊モノのヒーローになるんだって言ってたのに……澪ちゃんには保育士になって確か……教師だか保育士だかの『先生』って人が好きで、将来その先生みたいな人と偶然出会って……絶対に、絶対に結婚するんだって言ってたのに……」

それを聞いた途端正斗の目から抑えていた涙が溢れ出し、アルバムを見つめながら激しく嗚咽をこらえ始める。

### ○ 東京拘置所・外観

T「一年後」

翌春の日差しを浴びる東京拘置所。傍にある街路樹の桜は満開である。

### ○ 同・面会室

スーツ姿で緊張気味の正斗がいる。そこへゆっくりとドアが開き、女性の刑務官が入って来る。

続いて両足にギプスをした車椅子姿の澪がうつむき加減で入って来る。顔にはアザがあり、やつれている。

その姿に驚き、思わず立ち上がる正斗。

正斗「……ど、どうしたの？その足……」

刑務官「大丈夫ですよ。階段で転んだみたいで」作り笑顔で椅子に腰掛ける刑務官。

正斗「……だ、大丈夫って……ホ、ホントに？」

曇り顔のまま否定も肯定もしない漣。

漣「……………元気ですか？ コクは」

正斗「あ、うん……（座って）……コレ見て」

スマホの画像を見せる正斗。仲良さ気

なコクとハクの傍には5匹の子猫。

曇っていた漣の表情が一瞬で緩む。

漣「……なにお澄まして……幸せそう……」

正斗「大変だよ。部屋中ひっかき傷だらけで」

一瞬だけ微笑み合うもすぐにお互い

バツが悪そうに真顔に戻る二人。

正斗「……て、てかどうしたの？ 顔のアザ」

悲し気にうつむく漣。

漣「……私有名なですから……皆知ってるんで、

警察とヤクザに喧嘩売った忍者の事は……」

刑務官はバツが悪そうに顔を背ける。

漣「……ま、毎日地獄です……ここは、ここは

地獄の鬼だらけ、本物の魑魅魍魎だらけです。

可愛いもんです乱れた正義なんて……てか、

何で、何でこんな事に……」

うつむいたまま咽び泣く漣。

正斗「……ゴメン。あの時俺が止めたから……

キミの事守るっていう約束破って……」

漣は涙を拭いながらも首を振る。

漣「いえ、それが仕事でもんね、せんせ……

刑事さんの」

気まずい沈黙。

漣「……質問してもいいですか？ 刑事さん」

正斗「え……（悲し気に）……はい……」

漣「……何が間違ってたんですか？ 私達……

正義の、本物の正義の為に戦ったのに……」

黙って少し考えた後、口を開く正斗。

正斗「……た、戦わなければ良かったんじゃないか

かと思えます。昔の忍者みたいに」

漣は「え……？」と眉を顰める。

正斗「……正義は悪と戦って必ず勝つ……僕も

そうあるべきだと思ってました。でも、本当

の正義は、今の時代の正義は戦いで物事を

解決しちゃ駄目なんじゃないかと……戦争

の様な暴力は勿論、文字や言葉の暴力でも」

漣「……な、何でダメなんですか？ 戦っちゃ」

正斗「必ず敗者が生まれますからね、戦いには。

敗者って怪人ばかり負ける戦隊モノとは

違って絶対人間でしょ、現実社会では。凄く

大変じゃないですか、今の社会で一度負けた

人がその後生き抜いていくのって……」

漣「……そ、それはそうかもですね……」

正斗「だから誰かを負かす必要はないんです、

勝たなくていいんです、令和時代の正義は。

自ら戦わなくていいんです、昔の忍者や地球

を守る為だけにいる戦隊ヒーローと一緒に。

強さより、正しさより、優しさなんでしょう、

世の中を白でも黒でもない安全な秩序色に

彩る為に今の正義の味方に必要なのは……」

正斗の言葉を噛み締める様に聞く漣。

正斗「……あと、酔ってたからだと思います、

正義酒に」

漣「え……正義酒……？」

正斗「泥酔状態でしたから。行き過ぎた正義を、

乱れた偽物の正義を倒す為には何をしても

いいんだって……何が正義で何が悪かの判

断がつかない状態で……でも、今の令和人

そういう人多いし……実際俺もそうで……

だから、だから俺がもつと、もつと早く酔い

を醒ましてれば少しは、少しは軽い刑に……」

悔し気にうつむき、唇を噛み締める正

斗。その本気の熱い悔恨が凍りついて

いた漣の表情を徐々に解かしていく。

そこへ正斗の背後の格子窓から一枚

の桜の花びらが舞い込んでくる。

漣「(気付いて) ……あ……桜……」

正斗「……四月ですからね、もう……」

漣「……そうか……もう一年か……あの保育園

の入園式見てから……」

そこで漣はハッと何かを思い出すと

更に何かを考え始めながらうつむく。

正斗「……ど、どうしました……？」

漣「……いえ……あの……私の……私のお願

い聞いて貰ってもいいですか？ 多分最後の」

正斗「……え……な、何ですか……？」

漣は大きく息をついて顔を上げると  
正斗の顔を真つすぐ見つめる。

漣「……必ず……必ず連れて行って下さいね、  
正義酒なんか酔わなくて済む場所へ……  
忍び装束に身を包む必要もない場所へ……  
安全で優しい秩序色に守られた場所へ……  
お互い生まれ変わった時に出会ったら……  
……ぐ、偶然……ご、五度目の偶然で……」

正斗は以前猫カフェで話していた言葉  
を思い出して、「あ……」と固まる。  
変わらぬ真つすぐに正斗を見つめる  
漣の目からどつと涙が溢れ出す。  
そこで立ち上がった刑務官が漣の肩  
を叩いて面会時間の終了を知らせる。  
構わず正斗を見つめ続ける漣。

漣「……私……本当は行きたかったんです、  
過去を消せる場所へ。大好きな、大好きな  
先生と……」

以前の魔女の様な怪しさの欠片も無  
い澄んだ瞳で正斗を見つめ続ける漣。  
漣を見つめ返す正斗の目からも涙が  
溢れ出てくる。

無情にも車椅子に手をかけて、背後の  
ドアへ向けて押し始める刑務官。  
咄嗟に立ち上がる正斗。

漣は刑務官に車椅子を押されながら  
も振り返って正斗を見つめ続ける。  
正斗も涙目で漣を見つめ続ける。

ドアが開き、車椅子と共に魑魅魍魎  
のいる地獄へと消えていく漣。

冷たく、重い音と共にドアが閉まる。  
途端にその場に膝から崩れ落ち、床に  
突っ伏して号泣し始める正斗。

そこへ窓から暖かな春風に乗った桜  
の花びらが何枚も舞い込んでくる。  
悲嘆に暮れる正斗を慰めるかの様に  
舞い落ちる秩序ある社会色の花びら  
が冷たい現実色の床に広がる悲痛に  
満ちた涙を優しく覆い隠していく。

【終】